

324

347₁



始



B /



補增
佛
教
思
想
講
話

文學博士
前
田
慧
雲
著

大正
5. 5. 3
內交



序

凡そ一國の國民性の根本は必ず其國に於ける宗教思想の反映なること、古今を通じ何れの國の歴史に徴するも常に一致する處である。

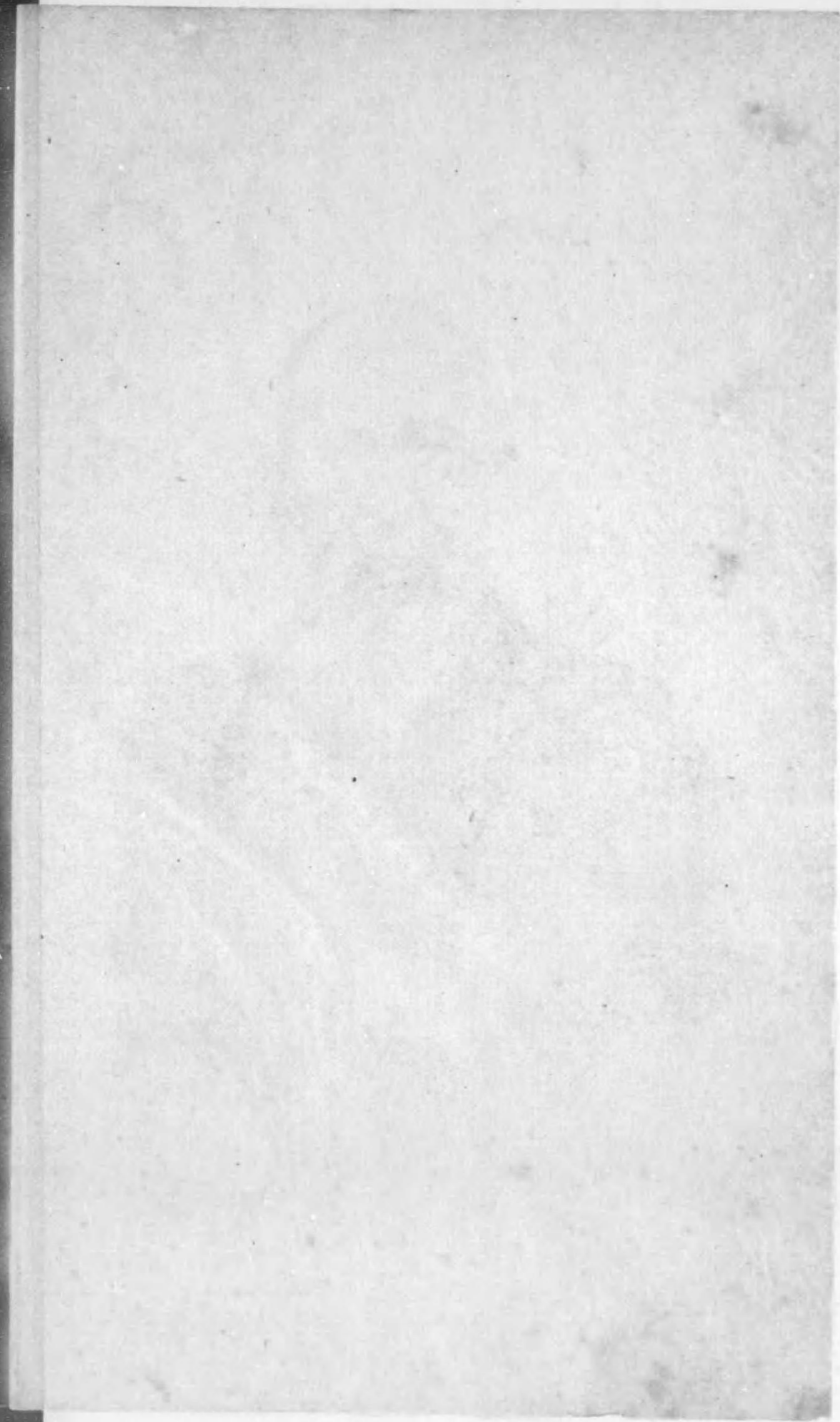
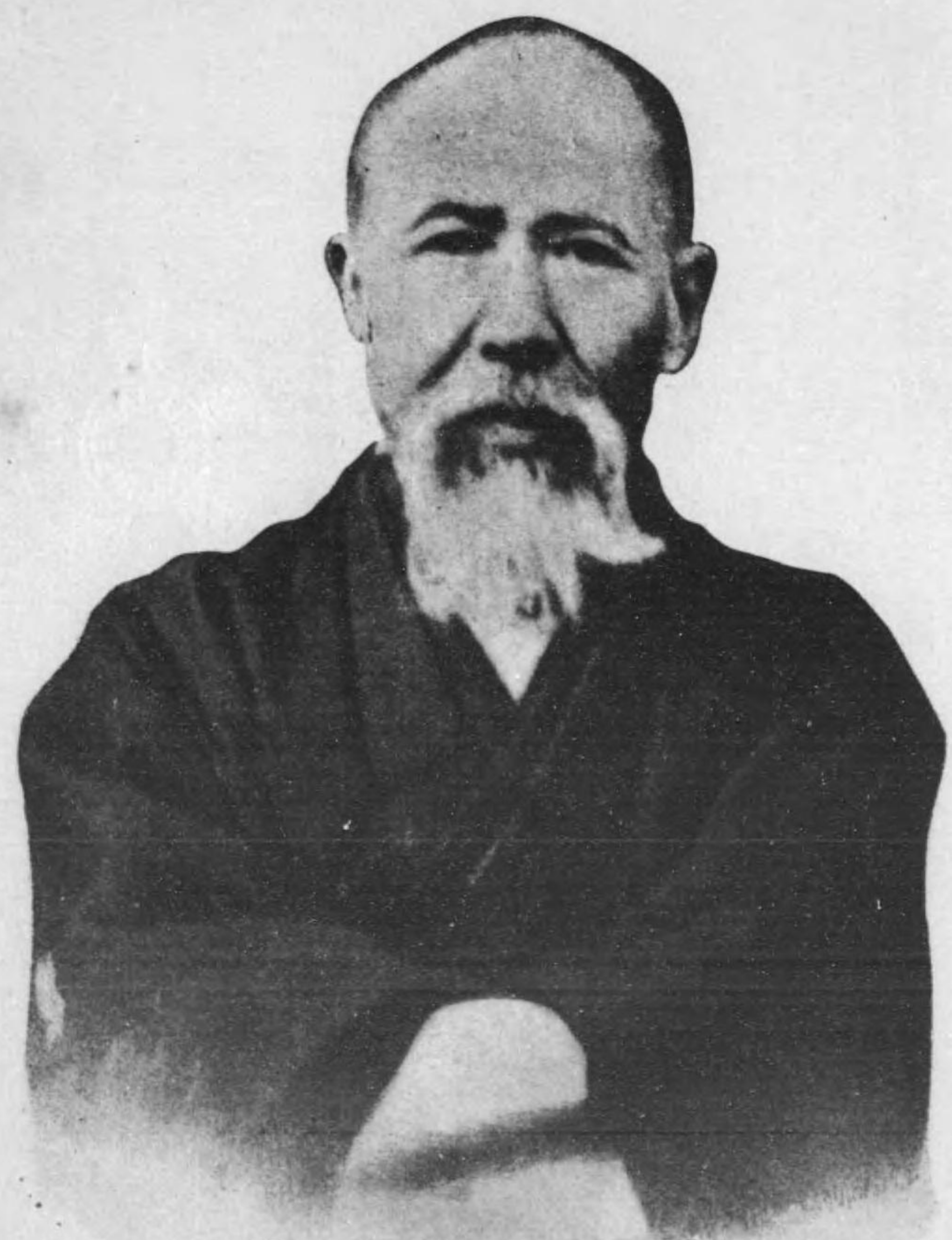
是を我邦に求むるも、他國に比類無き君臣の大義家族間の美風其他大和民族特有の國民道德を造り出せしものは、一に我邦の人情風俗に適合して發達し來れる佛教思想の發現に他ならぬのである。

然るに輓近西洋の文物思想輸入せらるるに及び、世の輕薄者舉げて是を渴仰し、彼れの清濁共に併せ吞むを以て文明也と謬解し、建國三千年の教育の淵

源を滅却して邦家固有の道德的基礎を危からしめんとする者漸く多きを加ふるに至りしは、眞に國を憂ふる者をして寒心に堪ゆざらしむる次第である。余が本書を著はせしは、是に依て我邦固有の教を説き、聊か近時國民思想の缺陷を補はんとするの微衷のみ。曩に發行せしものに補遺を加へ書肆を更えて上梓するに當り序とす。

大正五年四月

著 者 誌



佛敎思想講話目錄

- 一 佛敎の感恩思想……………一
以和爲貴…………… 儒敎の三世說…………… 佛敎の三世說
- 二 主従の關係と感恩思想……………一〇
朱舜水の慨歎
- 三 徳的因果律に就て……………一六
金貸の秘訣…………… 因果の關係は極て緻密複雑なり
- 四 其二……………
馬琴の因果應報…………… 因果と感應
- 五 敬畏心と修養……………三

君子と三畏……三畏と三寶

六 餘韻餘味……

余が少時の所感……萬事快意を戒む……口は禍の門

七 物質の進歩と精神の退歩……

平安朝比叡山の狀態……德川氏の狀態……本願寺の狀

態……早く便安に就くを戒む

八 其一……

諸學校の設備とその効果……寺院と學校は人民膏血の

結晶……金持のまねをすな……山陽の山紫水明處……

松蔭の松下塾……雲棲大師の詩

九 光輝ある生活……

萬事皆夢中の夢……或博士の慨歎……或富豪の後悔……

……佛敎の信仰は眞實の光輝なり……余の詩

一〇 人生の意義……

人生は元來無意義なり……之をして意義あらしむるものは信仰なり

一一 國民道德と宗教……

現時思想界の矛盾……忠孝と權利義務

一二 成功病の解熱劑……

桃水禪師の事……乞食と主人持

一三 偶感五則……

東京の夏……廢物の處置……寄附の強請……按摩生活

……書籍の強賣

一四 内を充實せしめよ……

信仰は不平心を除く……秦義勵師の逸事……八田氏の

逸聞……眞福寺の評言……説教よりは鐘の聲

一五 心の掃除……………次

 毎日毎朝の心の掃除……心上の塵埃……如何にすれば
 父母の恩を思ひ得らる乎

一六 正しき宗教を正しく信ぜよ……………一〇八

 犯罪人に就て關西と關東との比較……有教地と無教地
 の比較

一七 親戚間の音問を懈るな……………一四

一八 人に知れんことを求めるな……………一七

 鹿兒島隱士某氏に就ての話

一九 油斷するな……………一三

 犯罪人の精神状態に就ての話……油斷……慙愧

二〇 感應道交……………一六

 彦根の或人の上に顯れたる事實

二一 佛敎の二方面……………一三

 自力敎は哲學的解決なり……他力敎は宗教的信仰なり

二二 宗教と倫理道德との關係……………一六

 宗教に體用あり……信仰は體なり……倫理は用なり

二三 宗教と倫理と哲學……………一四

 哲學……倫理……宗教……佛印禪師と蘇東坡

二四 佛敎の眞信仰……………一五

 仙崖和尚の弟子に對する訓戒……一大事は出離生死の
 問題なり……想像と事實

二五 信仰の活力……………一六

二六 岐阜の一青年……静岡の或る病人
 信仰は精神上的の泰山なり……………一七〇
 東山の寓居……胸中の高尚遠大……人生上の事は遊戯
 的なり

二七 餘裕と宗教……………一七五
 吉田松蔭の牢中講義

二八 信仰の妙味……………一八〇
 福間彙吉氏の事

二九 茶後閑談……………一八六
 足元を見よ……落場を知れ……心得たと思ふは心得ぬ
 なり

三〇 善縁に近くべし……………一九五

三一 京都に於ける元旦……僧樸師の詩……居は氣を移す……
 ……干支を縁とせよ……………二〇〇

三二 先哲遺墨……………二〇〇
 月笠師の法讚録の序……峻諦師の衣食文……法霖師の
 對面偈……桃溪師の遺墨……僧樸道粹泰感の遺墨

三三 病窓閑話……………二一五
 余の病中の詩

三四 佛身佛土の實在……………二一八
 小も無限なり大も無限なり……顯界幽界と顯微鏡

三五 人生の表裏……………二二五
 木綿裏に絹の裏……裏面の危機……人生の表裏……國
 家の根底

三五

有生の樂虛生の憂……………三〇

暫有の生……樂しき哉自然……樂しき哉人事……其の處に安んぜよ

三六

夢幻の人生と眞實の人生……………三四

信仰の要求……死に處する難事……佛敎は空論を説かず……永久の生命を得るの法……死に對しての安心が肝要……眞實の生

三七

敎を尊重せよ……………三四

理窟を棄てよ……敎に順ふは修養の第一歩……佛敎は信を以て終始す……解るにあらず信するに在り……善生の六方禮拜……敎を忘れた議員

三八

宗教と道德……………三五

自分の心は當にならない……まじめであればあるほど自分のあらが見える……衷心祈れないのが本當……祈れない者を救ふ敎……罪惡と佛の慈悲……母の懷に乳を飲む兒……佛の照覽に對して慎む……宗教の信仰によらずば道德は徹底せず

三九

理想的婦人……………三六

國家の發展は國民の心掛如何による……女子の使命……日本婦人の典型

佛敎思想講話目錄終

附錄 日本佛敎發達の徑路 目録

第一席 佛敎の發達に三國の差別ある

ここを論ず……………二六二

佛敎に現象論と本體論とあり……………現象論の概要……………

…印度佛敎

第二席 其 二……………二九二

佛敎の本體論理論方面の發達……………支那佛敎……………實

行方面の發達……………日本佛敎

第三席 聖德太子の佛敎……………三〇一

十七憲法……………三經義疏……………法華經の精神

第四席 其二及び奈良朝佛敎の興廢を論ず……………三一

聖德太子の信仰……………天壽國の曼陀羅……………太子以後

第五席

佛教の狀態
傳教大師の佛教……………三六

第六席

傳教大師四宗一致の佛教……………大乘圓頓戒の大意……
：小乘戒大乘戒の區別……………小乘戒の大意……………大乘
戒の權實二種……………大乘圓頓戒の精神
其二及び平安朝佛教の興廢を論ず……………三三

第七席

其二……………源信僧都
授戒の儀式……………戒壇……………戒體……………法華と念佛……………三四九

附錄 日本佛教發達の徑路 目錄終

佛教涵養講話

文學博士 前田慧雲 著



道徳の實行は知識と感情の内、どちらからせられるであらうか。物の道
理を知り、道徳不道徳の辨別を明らかにし、は知識の力であるから、知
識からせられるは無論であるが、之と共に又一方に於て感情を融和すると
云ふことがなければ、道徳の實行は決して出来まいと思ふ。否、余は物の道
理を分別する知識よりも寧ろ程よく融和された感情の方が肝要であらう
と思ふ。何故此の融和された感情が肝要であるかと云ふに、世間に知識の

よく發達した人にして道徳の實行が出来ない人は多に反し、感情の程よく融和された人にして道徳の實行者でない人は少ないが爲である。然らば此の感情の融和は何に依りて出来るかと云ふに其は教育の側からても出来るけれども、宗教の側からした方が一層多大の効果があるに依りて、余は教育以外に宗教が必ず無くしてはならないと思ふのである。宗教と云つても今日社會に行はれて居るものは甚だ數が多くて、何れも感情の融和にはいくらか力がないではないが、余は就中最も力があり、且つ我が國民の奉ずるに最も適應して居る宗教は佛教を指しては外にはあるまいと思ふ。其昔聖徳太子が御一生を擧げて佛教弘通に御盡力なされたと云ふは全く此佛教が我國民の感情を程よく融和して道徳の開發に最も効力があると思召されたるに依りて、此を御採用なされたのであらうと思ふ。其證據は、太子御製作の十七憲法の上でも能く窺はれるのである。即ち其第一條に『和を以て貴しと爲し、忤ふことなきを宗とす』と仰せられて、凡ての上で融

和が一番大切である衝突しないのが肝要である。一家一國の能く治まるのも、家族の和合、君臣の一致と云ふ所から出来るものであると懇切に示されたのである。家内の和合、君臣の一致も、共に歸する所は個人個人の心根が打ち解けて互に和ぎ合ふことが其根本になつて居る。其心が解けて和ぐのはまた何に依りて出来るかと云ふに、同憲法第二條に『篤く三寶を敬せよ』と云ふことを以て其根本となされて居る。此の『篤く三寶を敬せよ』と云ふは如何なることかと云ふに、約めて云へば、佛教を信仰せよと云ふことになる。之に依りて太子の御精神を窺ふて見るに、太子が佛教を熱心に御弘通なされた思召がハッキリ解つて來るのである。即ち佛教の弘通が盛になればなる程、個人々々の心根が和ぎ合ふて衝突等のいまはしいことはなくなり、家内和合、君臣一致も、其所に出来ることとなる。故に太子は佛教を我國民に御推薦されたのである。

知恩報徳と云ふことが説かれて居り、殊に心地觀經の如きに至りては、中に報恩品と云ふ一品が説かれてあつて、一には父母の恩、二には國王の恩、三には一切衆生の恩、四には三寶の恩と、此の四種の恩分を報謝するのが佛敎であり。此恩分の報謝せられた方が佛陀であるといふことを悉しく述べられてある。聖徳太子以來佛敎と云ふものが多くの文學者の手によりて廣く國內に紹介せられてあつて、此報恩思想が國民道徳に多大なる貢獻をして居るのである。凡そ他人の恩分を知ると云ふは、吾人の感情の上に温かなる心地を與へるものであつて、心に温かみを生じ、其に依て感情が自然に和いて来る。即ち心の内に斯は難有いことであるといふ感じが起つて来るので、自づと我慢も折れ、執念も解けるやうになる。加之其恩徳に向つて感謝せんとするの念が、自然に湧いて来る。斯うなれば報恩の念が、遂には禁ぜんとしても禁ぜられなくなると同時に、其が直ちに感情を融和するの根本となり、次で道徳の實行となつて顯れるのである。故に吾人は佛敎の

信仰によりて、父母及び其他一切の恩分を深く感じて感情を融和し、以て道徳の實行を期せねばならぬのである。併しながら此恩分を感じると云ふは、獨り佛敎のみに限らず、何れの宗教でも出來ないではないが、佛敎の如く深く恩を感じしめるものが他の宗教では比較的少なく、殊に基督敎の如きに至りては、神に向つての感恩の念は極めて強く説くやうなれども、平等に偏して差別の側を忘れて居る傾きがあるやうに思はれる。故に君父の恩と云ふことになると、全く之を説いて居ないでもないが、餘り其邊を懇切に教へないから、忠孝を重んずる我國の宗教としては、ふさはしうないやうである。然らば儒敎は如何にと云ふに、此は基督敎に比較すれば、恩を説くことは、詳かであつて、而かも懇切を盡して居る點があり、且つ差別と云ふ邊をも、工合よく説き明かして居るから、我國には餘程都合のよい所が、澤山含まれて居るが、併し國王の恩と云ふことは、儒敎に説く儘を直ちに我國に採用する譯には行かない場合が屢あ

る。所が佛敎に至つては前述の如く君父を初めとし、一切の恩即ち夫婦兄弟師弟朋友等より萬物に向つて多大なる恩分を享けて居ることを説き示し、殊に國王の恩の如きは別して細密に説かれてあり、加之佛敎には、之を説くに過現未の三世に亘つて極めて深遠に其恩分の由來する所を示されてあるから他の敎ではとても見ることに出來ないよ、所があると思ふ。

此の三世に亘りて恩分を説くと云ふことは、實に肝要なることとして、如何ほど此恩分を委しく説いても、僅か現在一世の上で説いたのでは、人の心に深刻なる觀念を與へることが出來ない。自身の氣に入らない、自身の心に不満足の事柄があつても、其所に大なる諦らめをつけて、君父の爲に我が財産や生命を擲つて報謝を計ると云ふ所には行かない。人に深刻なる報恩の觀念を與ふるには、是非共此三世に亘つて説かねばならぬ。儒敎の如きは、佛敎の様な三世は説かないが併し矢張り一種變つた三世を説いて、其邊からして他に對する恩分を深く感ぜしめるやうになつて居る。其三世とは何

う云ふことかと云ふに、自身の父母及び祖父父母更に遡つて其祖先を我が過去と見る。又自身の子孫を悉く我が未來と見ると云ふ風に、筋違に三世を説いて居る。而して其過去たる父母祖父父母及び祖先の行爲が自身に影響を與へるものとして居る。即ち自身の今日あるのは、自身に學問や才能があつた斗りて斯く今日あることを致したのではない。父祖が會つて善行を爲し、功德を積んだ其餘慶を蒙つたが爲めて、所謂「積善の家には餘慶あり」の譯合に依るのであると云つて居る。されば斯の如く觀すると、たとひ自身に學問才能ありて立身出世しても、父祖に積善がなければ今日の如き出世は出來ぬと云ふ觀念を持つやうになりて、父祖に向つて報恩の誠を捧ぐと同時に、又子孫に向つても、子孫の幸福を希ふが爲めに自身の行爲を謹み、財貨や田地を與へるよりは善を爲し徳を積んで子孫に遺してやらうと心掛けるやうになる。斯うなつて來るのも誠結構てはあるが、此筋違の三世のみては、未だ人の心に極めて深刻なる觀念を起させることは出來ない。

然るに佛敎では筋違にあらずして眞直の三世を説くのであつて、親の腹を出た時始めて自身はあるのではなく、自身には其前生もあり、其又前生も前々生もあり、尙ほ此娑婆の壽命五十年乃至百年で死んだ時スツカリ自身がなくなくなるのではなくして、更に未來に新しい生涯即ち後生が永續してあるのである。今日の父母は、其前生に於て父母となるべき因縁が結ばれ、其又前生に於ても多大の恩分を享け、生々世々に於ける其關係が積つて遂に今日親子と云ふ結果を顯はしたのである。而して之は獨り親子の間に於て然るのみならず、君臣、夫婦、兄弟、朋友等の間に於ても皆同じ道理で過去生々世々に結ばれた因縁の淺からざりし結果であると説くのである。斯の如く觀ずれば如何なる人如何なる物に對しても常に吾人は恩を蒙つて居ると云ふことが知れ、其所に云ふべからざる温かい感情が湧いて來て、あらゆる人及びあらゆる物に向つて感謝し報謝せんければならない譯になつて來る。其所でたとひ今日の君父が自身に對して非道なことをし

向けることがあつたにしても、前生に於て多大なる恩分を享けて居ると思へば、今日の僅かな事柄を心に抱いて不忠不孝をすることは出來ない譯となる。嘗にそればかりではなく、何れの人に向つても今生こそ他人なれ、前生は君臣、親子、夫婦、兄弟等の間柄であつたと考へられるので、決して不親切な行爲は出來ないこととなる。故に他人からどんな非道な振舞をせられても過去を考へて心の底から諦めがつくこととなるのみならず、如何なる人如何なるものに向つても常にありがたいと云ふ感謝の念が生じ引いてはそれが總べての道德の實行となつて顯はれて來るのである。是に由つて之を觀れば、佛敎に説く三世感恩思想は獨り宗教の信仰上のみならず、實に世道人心の上にも亦多大なる利益があると云ふことが出来る。古來我が國民道德の根底は、是れに基づいて築かれて居るのである。近來やかましく唱へられて居る彼の武士道も儒敎が大に發達を興へたのてはあるが、其根底となつたものを考へて見ると、儒敎よりも佛敎の方が遙

かに多くの要素を持つて居たと云ふことは、古來の武士傳や古來の物語を一讀すれば、何人にも忽ち了解されて來るのである。故に將來に於ても、我國獨特の道徳を益發揮するには、是非共此佛敎の三世に亘れる感恩思想の力に俟たねばなるまいと思ふ。

二 主従の關係と感恩思想

日本には萬國に向つて誇るべき萬世一系の皇統を上戴き開闢以來今日まで美はしい國體が持たれて居るのであるが、これは一般國民の上に君を思ふ誠、即ち大和魂が發達して居るからであるといふことは、今更いふまでもないが、この君を思ふといふ誠の發達して來たのは、たゞ上御一人に對してのみでなくして、廣く民間にも、自身の仕へて居る主人に向つて忠勤を抽んずるといふこと、即ち主従の禮儀が美しく行はれて來たのが餘程その養成に與つて力のあることであらうと思ふ。昔支那の明朝が亡びた時

の社稷の恢復を謀つたけれども不幸にして志を遂げず遂に逃れて我國に來た彼の朱舜水が會つて徳川光圀卿の招きて水戸に到つた時、水戸藩における君臣主従の禮儀が非常に正しかつたのを見、慨然として涙を拂ひ扱いてふには、我明國にも、日本の如く君臣主従の禮儀が正しくして互に美はしい情誼が持たれて居たならば、社稷も今日の如き哀れな状態とはならなかつたであらうに。といつたといふことである。これは如何にもその通りである。

一體人間は何事によらず習慣の如何によりては、性格がどのやうにもなるものである。犬猫を殺しても何とも思はぬ、即ち動物に對して残忍の所作をして、心に少しも同情が起らぬといふ無慈悲の習慣が付けられると、それがいつしか嵩じて來て、他人を虐待し、或はこれに殺害を加へるやうなことをしても何とも思はないやうになつて來る。そこで近來はその邊に氣が付いたものか、動物の虐待をやかましういふやうになつた。これは大に

喜ぶべき事柄である。これと同様に、主人に對して忠實の心がなくなり、主從相互の情誼が薄くなるといふと、引いてそれが、一國の君主に對する忠義心が自然薄らいて來るといふことは、見易い道理である。然るに今日の敎育者に於ては、常に忠君愛國の思想を養成し、助長するに當り、たゞ、我君主には忠勤を抽んでねばならぬ、我國家に對しては愛護の念を抱かねばならぬと奨めるけれど、その日頃仕へて居る主人に對しての忠實の念を忘れぬやうにせよといふやうなことは、兎角等閑に附せられて居るやうに思はれる。

それで今日、その手近い主從の關係などを調べてみるに、その間に昔のやうな禮儀と情誼とがよく持たれて居るといふものは殆んどない。即ち今日は昔の主人家來といふ間柄が、傭ひ手、傭はれ手といふ名に變り、その關係が、禮儀や情誼で持たれて居るのではなうて、たゞ、金錢、即ち給料の如何によつて繋がれて居るといふ有様である。尤も今日は昔と違つて、その主從と

いふものも、法律上で權利義務が劃然と規定されて各々それによつて己れの職責を全うすればよいといふことになつて居るので、それに向つて昔の通りの念を持つてといふのは、或は無理に違はなからうが、さりとて東洋の美風が獨り日本のみに残つて居ると、朱舜水をして感嘆せしめた主從の間、禮儀情誼が僅かの間に地を拂つて、その面影は今やみるに由がないとは實に残念な次第である。而して所謂今日の傭ひ手なるものは、傭はれ手に對しては昔の主人が家來に對するが如きものではなくて、彼の勞に對する給料は與へてあるのだから、その給料だけの仕事はさせねば損であるといふやうに考へて無慈悲にこれをこき使ひ、また傭はれ手も、これと同じく昔の家來が主人に仕へたやうな念は持たないで、或は給料が少いと、或は待遇が少しても、悪いといふと、傭ひ手の迷惑も何も願みないで、忽ち他の傭ひ手に轉ずるといふ有様で、その相互の間には、一片の情誼も、毛頭の誠忠も含まれて居ないのである。

今もしもこのやうな風が世間一般の習慣となり、これを改むるといふことに注意されないやうになつたならば所謂習性となつて後には、畏れ多くも上御一人に對する忠義の念も我國家に對する愛護の情も漸々消失するに至りはしまいか、こう思ふと、實に寒心に堪へられないものがある。乍併今日では前にもいふ如く、法律上で相互の權利義務が明に規定されて居るので、これを如何ともすることが出来ないかも知れぬが、併し、何とかそこに方法を設けて、法律上の規定と君臣主従の情誼とを、甘く調和しなければならぬまい。余が思ふには、この調和は、他には決して途がなうて、獨り宗教的信仰に途があるのみであらうと思ふ。即ち宗教特に佛敎に示すところの感恩思想によつて、主従相互に恩分を感じ合ふことである。若しもこの感恩思想に依らないで、徒らに法律上の權利義務のみで相互に相對して居たらば、世の中はいかに無味乾燥に、而かも末終に如何になり行くか分らないのである。

然らば佛敎の感恩思想とはどんなものかといふに、佛敎には常に三世の聯つた因縁因果を説くので、たとひ今生に一日たりとも主となり従となるといふものは、これ偶然の出來事ではなくして、過去久遠よりの因縁が茲に純熟して、主従となるべき様になつたのであつて、所謂袖の振り合はせも多少の縁であるのである。かくの如く前生の因縁がこゝに純熟して、主となり従となつたといふのであれば、相互にその過去久遠よりの恩分を感じ合ひ、親切を盡し合ふといふことになるので、相互に温い情もその間に湧いて來るのである。前述のことは兼て余が久しう感じて居たのであるが、頃日ふとしたことから、橋南溪の『西遊記』を見ると、その中に余が感じたのと全く同じことが書いてあつた。併かも往時に於ける我日本の君臣の關係に就いての例としても、また彼の朱舜水が水戸藩の主従の情誼に感嘆したことまでも引いてあつた。これで見ると、南溪の時代即ち御一新前にも、已に主従の情誼が薄くなつて南溪をして慨歎せしむるものがあつたらしい。然

る所今日ではその當時よりも更に一情誼が廢れて、年々歳々その形跡をだに無くするといふやうになりつゝあるのであるから、世の教育宗教に携はるものも大にこの邊に注意して、佛教の信仰により、主従の禮儀情誼を昔に恢復するといふやうに努力せられんことを希望する。

三 道德的因果律に就いて

古來儒教の上でいふ「天道は善に福し淫に禍す。」とか或は「積善の家には餘慶あり、積不善の家には餘殃あり。」とかいふこと、即ち平たくいへば、よい行をしたものはそれ相應のよい結果が現はれ、悪いことをしたものは同じくそれ相應の悪い結果が現はれるといふことは、獨り儒教のみでいふのではなくて、佛教には盛にこの説を唱へる。殊に、佛教の説では、仲々深遠にこれを説くので、所謂三世因果善惡應報これである。余はこの思想は世間の教育上に非常なる關係のある問題と思ふ。支那に於ても今日に至るまで

この因果説の觀念が普通一般の道德の基礎となつて居るの模様が、日本に於ても古來この觀念が國民教育上、世間道德上の主なる要素をなして居た。然るところ、徳川時代に至り、中流已上は佛教の信仰が稍薄いて來て、佛教の因果説には少々疑を抱くものも生ずるに至つたが、儒教の方はこれに代つて、益勢力を得たために、道德の要素は常に「天道は善に福し淫に禍す。」といふことに歸して來た。そしてこの時代には人の知らぬ所で慈善を行ふこと、即ち隱徳の實行が非常に盛であつた。故にこの時代の修身書は、右の觀念を本として書いて居つた。今日でも新しい學問をし、科學的の理窟にかぶれたものゝ外は、何れもみな徳川時代からの右の觀念を土臺として行爲をなして居る。故に數からいへば、この觀念を抱くものが抱かないものより數十倍の多きに居るであらう。

然るに今日の或る學者連は、この觀念を以て一種の迷信の如く考へ、それを打ち碎かうとして居るが、余は感服の出來ないことと思ふ。たとへ理屈は

どうであらうが、前述の如く多數人の實行せる道德の基礎をなせるものを、淺薄な科學で碎くといふことは、恰もこの頃盛に北朝正統論を唱へるやうなもの、而してその人々の説を聞くに、道德的因果は從來佛敎者儒學者が説くが如きものではない。勿論道德の上にも因果律がないではない。けれどもそれは善行を積むとともに自身に愉快を感じずる。これに反して不善行をなせば、これとともに同じく自身に苦痛を感じる。それが道德的の因果である。善行をし不善行をしたとて、佛者儒者などのいふが如き物質的の報酬が觀面に顯はれるといふ譯のものではないといつてを。ところがそれは先年の説で、近年になると少しくいひ方が進んで来た。即ち若し人が善行をなせば、自身の心に愉快を感じる。それとともに自づから善良なる習慣をつくる。それが子孫の精神に遺傳となつて善良なる感化を興へるとになる。積善の家には餘慶があるといふのは、即ちこれ、積不善の家には

は餘殃があるといふのは、全くこの反對をいつたのに過ぎぬといつて居る。これは前説よりは稍進んで居るが、未だ物質上の果報があるといふことは認めて居ない。

一體道德的因果律はかくの如きに止まるものか、即ち物質上には應報がないと限るか。そこは大に微細の研究を要することである。が、吾々は右の如きの説には服することが出来ぬ。何より第一廣く世間の事實をみるに、祖先この方善行を積み來つた家は必ず榮え、否らざる家は必ず衰へるといふ例は實に收擧に遑がない。このことに就て、先般余は千葉縣の佐原町に行つた時面白いことを聞いた。佐原町の銀行經營者某がいふに、自分は金貸の秘訣を得た。それは他でもないが、金を他人に貸す時先づ第一に借手の家柄を調査し、當人の親或は祖父に於て、善行徳行を積んである家ならば、場合によつては無抵當で思ひ切つて貸すけれども、この反對で、祖父の代に不善不徳をして居る家とならば、規定通りの抵當なしでは、只の一文も貸さ

ないといふ秘訣とはこれだけのことである。實際試してみると積善の家
てはたとひ無抵當でも貸した金は必ず返すが積不善の家では抵當をとつ
て居ないと容易に貸金が戻らないといふたが至極面白い話である。斯様
な事柄は何れの地方に行くも常に見受けられる事實である。科學的の道
理々屈ては如何にいふも事實が證明するので仕方がない。
吾々は議論理屈は第二にして、先づ第一に事實の上から善惡因果を信ぜ
んとするものである。吾に事實の上のみならず、理論の上から考へても、今
日の學者連のいふことは頗る粗末な淺薄極まるやうに思はれる。精神上
にあることが物質上に表はれぬといふことは、理屈は科學一片で考へるこ
とで、實際宇宙の道理はかくの如く單純のものではあるまいと思ふ。吾々
は精神上的の事柄は必ず物質上にて現はれるものと考へる。今こゝに人
があつて隱徳を行ふたとする。その徳を受けたものは恵んだ人の誰であ
ることは毫も知らぬけれども、恵まれたものは之に對し非常に喜を感ずる。

その人は知らぬ、その名前は知らぬも施した人は如何なる慈悲の人であら
うかと、その恩分を深く感ずることであらう。その恩分を感じた心といふ
ものは、必ずそれを施した人の上に反感して来る。即ち換言すれば、人の喜
びの心が冥々の内に施したものの身邊に集まるのである。人の喜ぶ心の
集まる所には必ず事實の上に相應した好事が現はれる。かくの如き次第
であれば、精神の上の事が遂には物質上に現はれて來ずには居ない。元來
原因が結果と現はれるには、その間に事情が關係する。その事情たるや、實
に復雜極まつて吾々の單純な知識で知り盡すといふことは到底出来るも
のではない。人が今物を施す、その原因が他日物質上にその結果を現はす
には實に緻密複雑な事情が加はる。その緻密複雑な關係を研究し盡くす
べき知識があつてこそ、初めて從來いふ天道の善に福し淫に禍するといふ
事實を知ることが出来るのである。今日の淺薄な科學一片を基礎として、
これが判斷を下すといふことは、實に潛越な次第といはねばならぬ。

四 其二

凡そ物には原因があれば必ず結果があるものである。昨夜までは無かつたが今朝起きてみると、忽焉として庭に松の木が生へてゐるなどいふことはあらう筈がない。物の上に於て原因がなくて結果のあるべき筈でないといふことは、誰しも直ぐ了解の出来ることであるが、事柄の上で就て考へてみたらどうであらうか。茲に一軒の店がある平素餘り勤勉にもあらず。正直にもあらざるにも拘らず、漸々儲け出して行く。よくある例であるが、これから考へてみると、必しも原因あれば結果ありとはいはれないやうにも見える。随分世には、勤勉でも正直にあるにも拘らず、店の調子が狂つてきて遂に破産するものもある。勤勉正直の原因に對して、かゝる悪結果の來るのは不思議である。因果の道理が信ぜられないやうな氣もする。どうも事柄の上には、物に於けるやうな原因結果の理が無さうに見

える。尤も明治以前の人々は、一般に善因果惡因果といふことを信じてゐたが、今日の人はいかに信じないやうな傾向がある。文學の上からいつても徳川時代の小説などを見ると、盡く因果の理を含み、勸善懲惡を主眼としてゐた。

瀧澤馬琴といへば誰しも知つてゐるだらうが、此人は單に小説家である人ばかりもふかも知らないが、非常に眞面目な、そして學者で、随分隱徳を爲した人である。その書いた者は何れも人の教訓になるやうなものが多し。その一例を挙げれば、かの永代橋で田舎から來た爺さんが主人の金五十兩を何時の間にか紛失して申譯のないため、將に川に飛込んで死なうとしてゐる者を救つて五十圓といふ金を名もいはずに恵んでやつた人が後に深川の八幡の大祭に參詣してのかへるさ、フト其附近に茶店を出してゐる人で、前の身投をしかけた者に呼び止められ、茶店に招かれ、禮をいはれてゐる間に「永代橋が落ちた」といふ大騒ぎが始まつた。曾て五十圓を恵んで人を

救つた者はそのお禮をいはれてゐた爲にその禍を免れた是畢竟先年人を救つた報である云て居る。又これと同様の話がある。江州の或代官が盗人を處分しやうとしてつく／＼その容姿を見ると何所となく感すべき所がある。他日改心したら必ず役に立つべき者であらうと考へたので助けてやらうかとおもつたが何分盗賊をやつてゐることは事實で仕方がない。然るに此盗人が曾て盗んだ金ではあるが二十圓といふものを出して見ず知らずの者が金に困つて死なうとしてゐるのを助けたことのあるしを發見した。その善行の廉を以つて罪を放免してやることにした。その後代官の紹介でかの若い盗人は田舎へ職業に従事しやうと旅立つた途中一軒の茶店に憩ひ店の親爺からトテモ今日は川は渡れまいから泊るがよいと強ひられ一夜の宿を借りることにした。さて夜中に眠を覺してみると親爺が次の間で線香をあげ何か熱心に祈つてゐる。夜が明けて仔細を尋ねると「先年金に困つてゐるのを救つて下さつた恩ある人の幸福を祈つ

てゐる」とのことである。いろ／＼尋ねてゐるうちに彼を救つたのは即ち自身であると知れた。そこで彼爺は大に喜て幸ひ店は養子を探す所であつたから早速こんな良縁はないといふので目度此店の聲となつた。こゝういうことから考へてみると因果の道理は決して物の上ばかりでなく事柄の上にもあることは疑はれないと云てある。然るに今時の理屈をいふ者は「ア、ア、ア、そんなことは古い頭の人といふことである物の上には原因結果があるが事柄の上にはあるものではないといふ。善因善果、惡因惡果といふのは、アレハ教訓に過ぎない。よし事柄の上には因果の理があると認められるやうなことがあるともそれは偶然であつて因果の理からさうなるのぢやないと物知顔にいふ。近頃の學問をした人は多くは此説に賛成するやうである。「積善の家には餘慶あり、積不善の家には餘殃あり」などいふことは、單に教訓だといふのは是非もないことである。然らば善い事をして好い果が來ないか、又惡い事をして惡

い果が来ないかと質問すると、彼等は答へて曰く「イヤそれは誰でも善いことをすれば何となく愉快を感じ、悪いことをすれば何となく苦痛を感じる。此意味に於て善因善果惡因惡果といふならば吾々も賛成である」と。こんな考を以てゐては道徳々々とやかましくいつても駄目である。因果の理を信ぜずして道徳を説いたところて効果はない。陰徳を施して置けば何時かその福徳が自分に報うてくるといふことは疑ない。これを信ぜずしては世道人心を導くことが出来るものではない。今の學者は理屈ばかりをいつて毫も世道人心の利害得失に考へ及ぼさないのは痛嘆すべきことである。佛教の上では物の上にも因果の理がある如く事柄の上にも亦た因果の理があると説いてゐる。これは争ふべからざることである。凡そ佛法には感應といふことがある。これを知らずして佛教は説けない。またこれを知らずしては因果の理は説明出来ないのである。今の學者は感應を眼中に置かない。感應とは此方の精神が彼方の方へ通ること

である。甲のが乙へ響くことである。感應の道理が知られるれば人が見てゐるやうが見てゐないがソナナことには頓着せずして所謂陰徳も出来るのでたとひ東京市中の人間が誰一人知らずとも市民の利益になる事に金を出してあげれば早晚市民の喜悅感謝の念は金を出した者に響いてくる。悪いこととしてもヤハリその通り市民の迷惑はやがて自己の迷惑となつてくることは疑ひない。尙又今日は精神療法だの催眠術などが非常に流行してゐるやうだがこれは一に吾々人間に感應といふことがあるから出来るのである。人間の心は頭の異なるやうに個々別々に分れてゐるものと考へてはならぬ。恰も吾々人間の心は一大平面を造つてゐる。一方を打てば必ず他に響くものである人の知らぬやうにしたことでもその善惡如何に拘らず必ず他の人に響くのである。即ち最初これを爲したる者へ感應してくる。

所で今假に善事をしたとする。それが直ちに人に認められて禮をいは

れるといふと、それは聊か帳消といふ姿になる。古人も「顯徳よりも陰徳」といつてゐるが如く、人に知られぬやうにした善事がゆかしいのである。悪い事したといふので頭の一つもボカンと擲られるといふとそれと一寸帳消の姿である。が、人に知られぬやうに私かに爲した悪事は、何時かは自分に苦痛を與へることになる。必しも將來を慮りてなく、現在に於ても因果の道理を辨へて、身を謹まねばならぬ。かくしてゆけば不正直の者が大金を儲けやうとも、また正直な人が大損をしやうとも天道是非乎なんとといふ煩悶もなく、また他人を怨みることなくしてゆくことが出来る。のみならず今日自己の爲すべき仕事をば、おもしろく楽しく、勇ましく行ふことが出来る。而して更に一步深く考へてみると佛敎諸宗を通じて因果の理を信ずるといふことは、共通の信仰である。此共通の信仰の上に、或種類の觀念方法が加はつて、茲に初めて各宗の安心が成立するのである。かくて日蓮と淨土、禪宗と眞宗、各々異なる色彩の信仰は生ずる。この因果の理は、

人生五十年の間は、勿論未來にまで通ずる眞理である。今の人間はたゞ五十年の生活を都合よくしてゆかうとばかり考へてゐる。而して彼等は「宗教は、吾々の不安、苦痛、煩悶、失敗を慰めるものたるに過ぎない」といふ。宗教はソナものではない。世間の事は、自分で處理してゆくがよい。世間の吉凶禍福を神佛に頼むから迷信が生ずるのである。人生五十年の出來事は、自分で片付けられないなら親に相談するがよい。兄に相談するがよい。友人もあらう、親族もあらう。何も神佛に無理をいふ必要はない。人生の不安だの煩悶だの失敗だのといふ苦痛を除かんがため、宗教ぢやない。宗教の眞の價値は、「吾々の落ちつく所をきめる」ことに存するのである。吾々の落ちつく所をきめるのは、倫理でも哲學でも出来ることではない。唯一の宗教の力があるばかりである。その宗教を以て、小ひさな失敗や煩悶をよくする道具にするのは心得違といはねばならぬ。吾々が一度、吾々の落ちつき場所を宗教によりてきめておいて、此堅固不壞

なる大盤石の上に坐してゐれば、五十年の甘いも辛いも何程のことであらうぞ。雨降れば降れ、風吹けば吹けだ、これを眞宗では、後生の一大事を決着したものと云ふのである。人間は、恰も水面に泛べる泡を見たやうなものであるから、風が吹けば東へ西へ南へ北へ、飛びゆくだらう。その泡の身を以て消えねばよいが、といくら藻掻いても駄目である。消えたらどうなるか——これを平生から決定しておかねばならぬ。今日の所謂學者は、「人間が死んだら火の消えたやうなもの跡形もなくなる」といつてゐるが、その癡千里眼などが出ると吃驚して奇らしがる。佛敎では、數千年來印度支那日本に亘りて、何萬人といふ人が心血を注いで研究したところである。今の學者は此經驗がない。かへすくも吾々は因果の理を信じ且つ落ちつき所を決定したる上に於て此の五十年の人生を右の信仰力によりて支配していかねばならぬ。

五 敬畏心と修養

余は、毎度いふことであるが、人には敬畏心即ち今日の語ていはば敬虔の念といふものがなかつたならば、決して向上する事の出来るものではないと思ふ。孔子の語にも「君子有三畏。畏天命、畏大人、畏聖人之言。」小人不知天命而不畏也。狎大人、侮聖人之言。」とあつてこの敬畏心を持つといふことは、唯佛敎上のみでなく、儒敎の上でも常にやかましくいふ所である。然るに今日の青年は、この敬畏心即ち敬虔の念を持つべきことをいはぬてはないが、その對象が一向明かてなくして、唯漫然として敬虔の念を持つといふばかり。何に向つて敬虔でなくてはならないといふやうなことは一向はつきりしないやうである。尤も人によると、それは眞理に向つて敬虔の念を持つるのであるといふものもあるが、抑この眞理といふは、元來知識の側に向いて居るものであるから、感情に持つて來ると格別強い力を與へる

ことが出来ぬ。即ち知識で考へる時は、真理はなるほど活きた靈妙な作用を致すてあらうが、感情で考へると一向とりとめたものとならずして、殆んど死物と同じやうなものとなるから、これを對象として敬畏敬虔の念を持するといふことは實際に於いて力がないのである。

孔子が天命を畏れるといはれた天命は宗教でいふ所の人格的の神佛を認めたことかどうかは議論に涉るから一口にいふことは出来ぬが思ふにその天命の語は所謂眞理の語とは違つて吾人の感情の上により大なる力を與へるやうである。即ち何か知らぬが明確に一種靈妙なる活物が認められて居る。そこが吾人の修養上に多大な功があるところである。孔子は「論語」等に天命を畏れるとは常にいはれてゐるが理を畏れるとは一語もいつて居られるのを聞かぬ。て余は今日の人の如く、その對象を眞理といつたのではどうも敬畏心を拂ふことが出来ぬやうに思はれる。この孔子の語たる君子の三畏をば昔の某大徳は佛教に説く篤敬三寶とその意

に於いて全く同じことであるといはれた。即ち天命を畏れるといふは、これ篤く佛寶を敬すること、大人を畏れるといふは、これ篤く僧寶を敬すること。また、聖人の言を畏れるといふは、これ篤く法寶を敬することであるといはれたが實によく配當されたものである。吾人は今修養を計らんとするには、この三畏或は篤敬三寶といふことがなくてはならない。されば聖徳太子は、十七ヶ條の憲法中にも、その第二條に於いて、この篤敬三寶を勧め、これを以て道徳を實行するの根本とせよといはれて居る。

然るに今日の青年は前にいふが如く、唯口に敬虔を唱へるばかりで、その對象が極めて不明瞭であるために、その實行は一向擧らぬのみか、却つて孔子が誠められた、「小人不知天命而不畏也、狎大人、侮聖人之言。」を實現して居るといふ始末である。て、青年は天命を知らないから神佛の御照覽をば少しも思はぬ。それでこれを畏れるといふとがちつともない。また大人を畏れ、君子を畏れるといふことがないから、自分が曾て教を受けた良師に

向つても、また自分を現に祐助して呉れてる善友に向つても、更に敬畏を拂はうとしないのみか、如何なる人をもみても、これは感服すべき人である。自分はこの人の指導によつて道に進まねばならないといふ念が起らずして、どんな師に逢つても、友に遭つても、先づ第一にその人の缺點から穿鑿をしてかゝるといふ始末。次にまた、聖人の言に對しては常にこれを悔るといふ工合であるから、かれは釋尊のお語なればかくの如く實行せなければならぬといふか、これは孔子のお語なれば、かう服膺すべきものであるとかいふ様な念は、少しもなく、たゞ一種の格言としてこれをみるとか、或は時によると、これを冷かに批評して彼は是であるのこれは非であるのといつて居るといふ風であつて、畏れるとか敬ふとかいふことは、少しもない。また、これが釋尊や孔子やに限らず、如何なる倫理上の學說でも、それを聞くのは實行するがためではなくして、研究のために聞くといふ次第である。

もとより研究も悪いことではないが、徒に研究々々といつて、甲の説を聞

いてはそれに感服し、また乙の説に面白さうな處があると、直に甲を捨て、乙に往き、更に丙をみては、これに趣かんがために乙の説を擲つこと、弊履の如くするといふやうであるから、後には遂に思想が錯綜惑亂して、遂に歸趣するところが終生ないといふやうになる。これといふが、この青年には、初めに於いて聖人君子の語をもつて自分が德行に進むの標準とするといふことをしないで、所謂聖人の言を侮つてかゝるからである。一體道徳といふものは、實踐上のことであるから、議論や理屈通りには行くものでない。だから釋尊のお語であるとか、或は孔子のお語であるとかを標準となし、而してこれが躬行に努めるといふ風にしなければならぬ。一たび標準が決つて、それを實踐しながら、漸々他の聖賢の語を研究し、以つて自分の修養を計るやうにしなければならぬ。尤もこれは、獨り宗教や道徳の方面ばかりでなく、所有他の藝能の如きでも、また同じことである。

例へば、茲に書を習ふものがあるとする。この人が初めからして、董其昌

もよいからこれも習ひ、また文徵明も悪くないからこれも習ふといふやうに、彼をも習ひこれをも習ふといふやうにしたならば、決してその人は書が上達するといふことはない。書を習ふには必ず自分が最初によいと思つたものを、一つ撰んで一生懸命に習ひ上達するまでは決して他に手をつけてはならない。然るに世人は書を習ふにかくの如くしないで多く古人の書を集め、それに就いて一々書法筆法の議論をして、こゝはよいがかしこは悪いのと批評ばかりに時を過ごさんとして居る。なる程かくして書風を論じたならば、何れの書にても長所短所得点失点は見出されるに違ひないが、書を習ふものにとつては何の益にも立たぬ。かくの如き議論は、一つの書をどこまでも習つて、その書の筆意が充分自分のものになつた上、自己の見識で自由に取捨し以つて自己獨特の書風を創めるがよい。修養や道徳のことも同じこととて、初めは何か一の標準とすべきもの、手本とすべきものを決めて置き、それによつて主義を得見識を作り、而して後釋尊孔子等の

教及び東洋西洋の諸思想を研究して、取捨を自由にするといふやうにしなればならぬ。近いいは、前述の如き儒敎の三畏、佛敎の篤敬、三寶等の如きを、先づ第一自分のものにし、自分はそれによつて修養の手本を決めて、それによつて道徳を實行しつゝ進み、神佛師友に對し、憚り恐れるこゝろをもち、その神佛師友の目にあまる行をしては濟まぬといふところから進んで行き、それで漸々修養して、一かどの主義信仰が確立した上で、今日の學者の説をも斟酌し、然るべく取捨折衷して行くやうにしなればならぬ。

六 餘韻餘味

世に餘韻餘味、餘地などいふ語があるが、あれば至極面白い語であると思ふ。何事によらず何物によらず、總べて物事をするにはこの餘韻餘味、餘地といふものがなくてはならぬ。文字を書き文章を作り、或は詩歌を吟詠するとか、または一箇の茶碗、一箇の花瓶を造るとかといふ場合にも、その物

の表に現はれ切れなくて、裏に一種の味、一種の聲の含んで居るやうにせねばならぬ。若しもそれが缺けて居たならば、外見はいくら奇麗に出来て居ても暫くみて居る内に忽ち厭な感じを生ずるものである。これは雷に文字文章乃至器具等の如き物質のものばかりではなくて、吾人が日常の行為でも悉くさうである。然らば行為に存する餘韻、餘味等とはどんなものかといふに、それは如何なることをするにしても、意に思ふ儘を十分に行ひ盡し、或は言ひ盡さないで、少し許り控へて置くことである。前述の文字、詩文といへば、餘り巧みに過ぎない所に、少しく餘地を存して置くことである。

吾人が日常の談話にても、興に乗つたりなぞして、思ひきりいつてしまふと、後で考へてみて一向餘韻、餘味が無なつて居るに氣付くことが多い。昔から物は八分目にせよといふ俗諺があるが、これは全くこの意を簡單にいふものである。花は半開を愛て、月は微陰を愛する。もう二三日で満開といふ時分に見ると、花にも面白味があり、月でも同じこと、今が正に満月と

いふ晩などにはちよつと見ると、美しうはあるが、美しいと思ふその下から一種の哀感を生ずるものである。これは萬事が悉く同じことである。それで余はかういふ感を抱いたことがある。といふは余が小兒の頃、自宅の裏に壊れかゝつた物置があつたが、それがいかにも氣になつたので、建て替へたらよからう何故建てかへないのかと父にいふと、父は屋敷の中に一位は壊れかゝつたものもなければいけぬといつて、一向構はれなかつた。また余が伯父の家には、茶の間の障子が眞黒くふすぶつて居てそれにちよいく、新しい切り張りなぞがしてあつたので、恰も辨慶編のやうに見苦しかつた。そこで、ある年新しう張り替へた所。伯母の父がそれを聞き惜しいことをしたものだ。一家の内の一箇所位はそんな所もなければならぬ。それをすつかり改めるとはいかにも心ないことをしたものであるといつたことがあるが、これ等が前と同様の味のあることである。

はりになるといふ程でもないが、事柄によつては、その爲に思はざる禍を惹起することがある。て余は平生家族のものに誠めるのであるが、下男、下女、或は小兒なぞに不都合なこと起つて、これを責めなければならぬ場合には、胸の堪能する程過失を擧げて責めてはならぬ。殊に小兒の場合などには、自分屈伏するまで責め叱るといふやうなことをするものではないといふことである。人を責めるに十分に自分の意の堪能するまで責めると、自分では一時胸のすくやうな氣持がして快いけれども、ために先方ではこちらを怨むやうになりそこから意外の禍を惹起すに至る。これは下男、下女及び小兒等にかぎらず、出入りの人無心に來るものに向つて同じこととて、むやみに罵り叱ると、他日不慮の災難を生じ所謂口は禍の門といふ語を實現するに至るから、大に注意を拂はなければならぬ。殊に前述の如く小兒を叱るに自分の意に隨はぬといつて強ひて屈伏せしめやうとすると小兒によると強情張つて、却つて反抗し、遂には父兄もしてみやうがなくなり、或は打

擲するとか、或はこちらからあやまらねば始末はつかぬことになる。かくては子弟の教育上甚だおもしろくないことになる。故に單に叱責することのみならず、總べてことを爲すに、自分の意に快しと思ふまでやり遂げるといふことはいけない。必ず何事にも餘韻餘味及び餘地を残すといふことにせねばならぬ。

併しながら、兎角自分の意の堪能するまでやりたい、不盡の所のあるは氣になつてならないのは人情である、さればこれを忍んで程よい所で制止するには、忍耐力の修養がなければならぬ。忍耐力は一朝一夕に養はれるものではないから、大に努力せねばならぬ。吾人は努力して耐忍力即ち佛教に説ける忍辱の修養に注意し、常に物事には餘韻餘味及び餘地を存して置くといふことに心掛けて居たならば、恐らくは不意、不慮の災禍も割合少く随つて一生も比較的平穩に送れることであらうと思ふ。古人の語に、「覺人之詐、不形于言、受人之侮、不動于色、此中有無窮意味、無窮受用」とあるのは前

述の意味の一端をいひ表はしたもので、これまた一種の處世法を教へたものといふべきである。

七 物質の進歩と精神の退歩

凡そ何れの方面に就いて見ても、物質の側の進歩した時は、精神の側はこれに反比例して衰頹する傾きがある。宗教の上からいうても、他の社會の方からいうても、何れも右のやうな傾向が認められる。今宗教の側て見ると、彼の比叡山の如き、彼の山が傳敎大師在世の當時は、思ふに物質的の方面はたいしたものでもなかつたであらう。當時はその方面は、南都の舊佛敎の方が遙に上であつたに違ひない。それが慈覺智證の二大師を経て、第十九世の慈悲大師に至つて、叡山に於ける物質的勢力は殆んど絶頂に達した。それは村上天皇の御宇で、平安朝は正にその中半であつた。然るにこの物質的勢力の絶頂に達した當時は、この山に於ける精神的勢力は如

何であつたかといふに、實に精神の空虚はその極に達して居て、僅に現世の祈禱で一般の民心を繋屬せしめて居に過ぎなかつた。この時空也上人は斷然起つて山を下り、京都に出て、大に念佛を民間に鼓吹せられた。故に上人をば稱して市の聖といつた。また慈悲大師の滅後、その弟子源信和尚は、深く山上の横川の一隅に閉籠つて、偏に念佛の一法を修せられた。この二人は何故かく山を遁れて市に走り、或は深山に籠居して念佛を修せられたかといふに、これ、叡山の宗教的感化が全く消滅して、一般の民衆は精神上暗黒世界にさまようて居たから、この二人は民衆の要求に應じて、或は市に走り、或は山に籠られたものである。この二人の行動によつて見ても、いかに三千坊を擁して、輪奐の美を誇つた叡山の中心が精神的に衰頹して居たかゝる恩ばれるのである。

以上は宗教の方面であるが、政治教育社會一般も皆これと同一である。彼の徳川幕府の物質的勢力の全盛時代は何時頃であるかといふに、將軍は

第十一代家齊公の時、文化天保頃の榮華といへば、正にその極點に達してゐた。その頃頼山陽は日本外史を書いたが、その最後に於て、其盛なるを極むといふと書いて筆を結んで居る。この語は短いけれど非常に味がある。實に無限の煙波である。先年余は備中笠岡の家永といふ家て山陽が書いた日本外史の草稿といふのを見たが、朱や藍で幾度も原文を推敲してあつた。その原文は、この幕府の榮華を極めたといふ所を、二三行に亘つて長々と書いてあつたが、最後に、其盛なるを極むといふの一句に訂正してあつた。實に此一句には、徳川幕府の威勢は漸く衰へて來た、全盛は既に盡きて居るといふ意味が持たせられてある。この頃からして勤王論が諸方に起つて、間もなく幕府は亡んだのである。實に徳川氏は、物質的勢力の全盛を極めた頃には、精神的內容が空虚になつて居たので、忽ち衰亡にも及んだのである。

此の如く古來の歴史を調べて見ると、凡ての物に於て、物質と精神とは盛

衰が常に反比例になつて居ることが知れる。そこでこれを以て今日の時代を顧みると、宗教殊に佛敎の側では、兩本願寺の如き、物質的方面は既に頂上に達して居りますまいかと思はれる。曾て文久年間に修せられた高祖の六百回忌の法會が今や満座に及ぶといふ時、圓成院南溪勸學は大學林の講堂に於て涙を揮つて本山の精神的方面の空虚になつて居るのを奮慨された。それが動機となつて本山改革の運動が起つたといふことである。今日も本山はその外形上からいふと、實に盛大を極めて居るやうに見えるが、内容の方はいかゞのものであらうかと案ぜられる。獨り宗教ばかりでなく、國家社會の如きも同様の感に堪へない。今日は所謂物質的文明は非常に進歩して、道路は廣くなり、家は大きくなり、科學を應用した機械は諸方面に用ひられて、交通機關は如何なる山村僻邑にも備はつて來た。この調子で進んだら、三十年五十年の後には、物質的方面の發展はどの位まで及ぶか、實に想像を絶する次第である。しかしこれに反して、精神的方面は、どう

かといふに、前後の慮りもなく、一にも二にも西洋の思想でなければならぬ。様に之感染して、在來のよい點まで没却して願ないやうな有様であるが、この調子で行つたならば、三十年五十年経つ内には外國の思想に侵略されて、日本固有の精神的特色は亡んでしまひませぬかと案ぜられる。支那は清朝に至つて考證學を用ひた爲め、遂に今日では國が亡んでしまつた。日本の徳川氏は、朱氏學を用ひた爲め、遂に幕府を滅してしまつたが、今日の日本人は、西洋思想を崇拜する爲に、その國を滅亡させはすまいかと思はれる。かやうな事は萬々あつてはならぬ。またありもしないであらうが、併しなから國民の教育上には、充分右の點に注意しなければなるまいと思ふ。

さて、以上述べた所は餘程事が大きくて、各個人とは直接關係がないのである。併し各個人に於ても同じ道理で、一身一家の上にて物質的方面が發達すれば、精神的方面が反對に退歩する。實際吾人は、若い時に希望の光明にあてがれて居る頃は、物質的衣食の如きは極めて意に充たなくても、精

神的學問、或は修養の如きは、大に發達し向上するものであるが、それが稍成就して、衣食にも不自由をしなくなり、一家をも持ち、妻子をも左右にかしづかせるやうになり、進んでは下婢下男をも使ふやうになると、最早學問もしんが止り、修養の道をも辿られなくなるものが多い。故に古人は、若きものの便安に就くことを非常に戒めて居る。されば物質的の進歩發達は、誠に喜ぶべきであるが、また一面に於ては、大に憂としなければならぬ。とはいふものゝ、吾人は今から家も捨て、妻子も捨て、不自由なものと簡單生活に入るといふ譯には、いかぬから、常に物質の發達は、精神を墮落に導くものであるといふことを肝に銘じて、物欲に溺れず、金があつても贅澤せず、妻子があつても我儘はないやうにして、常に精神の荒怠を警戒しながら、世に處して行くやうにしなければならぬ。

八 其二

私は前の項に於いて物質が進歩すれば精神が退墮する傾向のある事及び現今の社會は方に物質的完全の爲めに稍精神的方面が墮落に傾きつゝありはせないかと云ふ事を話したが此の物質過重の傾向は現時社會上の事實として何れの方面にも甚だ顯著である。一例を掲げて申すならば。教育界に於いても近來は著しく物質的方面の完成を期しつゝある。勿論精神的側面も充分發達する様にあらゆる注意が注がれてはあるが比較的物質的側面が重ぜられてある。其れは外でもない近來學校々々の建築等が漸次立派になり、何れの町村何れの區へ參つても其町村及び區民の生活程度に比して學校は遙かに結構を盡し中には贅澤に走つて居ると思はるゝ者さへ少くない。

現に東京市等でも果に學校が改築せらるゝが其の改築が實行せらるゝ以上校舎の規模を始とし内外諸般の設備に至る迄必ず前設計よりも遙に擴大完成せらるゝのみならず窓の開閉が如何とか向きが何うのとか、さて

は生徒の腰掛机など些細の器具に至る迄綿密精細なる注意が拂はるゝのである。

是の如く學校としての規模設備を完全にするのみならず各生徒の用具などに對しても又同じく完全なものを要求する。例せば以前の習字をさせるのに反古て事を足らして居たのを今では白紙でなければならぬと云ふ其他筆墨ノート一切の用具に付て然るものは不可然るものを買へといふ様に教ふるなど其完全を期するには誠に用意周到である。そうして是れは最高府たる文部省始め極力獎勵する所であつて現時教育界の一般趨勢となりて居る。

是の如く物質的の完備を事として居るであるが、而して之が教育上に如何なる効果影響を齎らすかと考へて見ると、其知識の發達、徳性の涵養に幾らか其効果はあるに違ないが、而してこれら物質的完備を以て教育全般の完成をも同時に期するのは甚だ難事である。だから假令學校諸般の設備が如

何程擴大全備したからとて直に生徒の知識が進むものではない、又白紙に習字をさしたからとて急に字が上手に書ける譯のものでもない。然るに今の教育當局者は無暗に物質的の完全をのみ計ることに腐心して居るやうであるが、吾人は其意味を解するに苦むのである。聞く所に依ると、學校教育費の爲め、町村民の支出が多額となり、之れが爲めに紛擾を惹起した所さへあるそうである。

従來は寺の本堂を宏莊にしたり、境内を立派にする事などに對して、或る方面よりは之れを攻撃し甚しきに至つては、人民の膏血を絞り無用の遊民を養ふとさへ云ふ者があり、今尙其考へを持つて居るものもあるが、今や學校に對しても、其同じ攻撃の箭を向け得らるゝ様になつた。即ち殆ど無用の點に迄學校設備の擴大壯麗を企て、人民の紛擾を起して迄も之れを遂行しやうといふは、畢竟人民の膏血を絞るのであるまいか、かやうに云ふたならば、教育者は學校の設備、生徒用具の完全を要求するのは、一偏に教育の

目的を達せんが爲めのもの、毫も無用のとてはないと云ふかも知れぬが、而し近來米價暴騰の結果、窮民が多くなり、其慘狀は延いて學校にも及ぼし、従來の要求が實行せられなくなつた所から、習字には白紙でなくても宜しいノートは、帳面を裏返したのでよいといふ様に成つた。されば之れでも教育の目的は達せらるゝてはないか、已に反古や帳面の裏返して間に合ふものを白紙や新しいノートを用ひさするは、之れ無用と云ふべきではあるまいか、更に一步譲つて如上の物質的完全を教育の爲めだとしても、教育の目的は只教育の爲のみではあるまい、同時に社會の事も顧慮しなければならぬ、理已に是の如くなれば、町村區民の争擾を惹起してまでも教育の目的だからして、敢行しやうとするは、應て自家の目的に反して居るものであらう。故に吾人は是の如き物質的過重の傾向を以て、已に學校教育の精神的方面が墮落した結果であると信ずると共に、この傾向は益々精神的方面を墮落せしむるものと信じ、前途甚だ憂慮に堪へぬのである。

されば教育に於ても餘りに物質的方面を過重するは或る方面よりは賞讃すべきことであらうけれども又一面大に注意しなければならぬと思ふのである。

如上の學校教育に就いて物質的過重の傾向は其裏面に於て必ず精神的退歩を含むと同時に更に之れを助長するものなることを述べたのであるが此道理は如何なる社會にも示さるるのであつて吾人の實際生活も又然かく支配せらるるのである。

私の漢學の師匠が常に門人に示された言葉に、書を讀む者は決して居所を飾るとか或は書畫骨董を愛玩するとか金滿家の真似をしてはならぬ幾何程金滿家の真似をしたからとて到底及ぶものではない。だからさやらの事には心を勞せず一心一向に書を讀み精神の修養と云ふ事に専ら心を傾けねばならぬと。實に先生の如きは何千人と云ふ門人を持つた人であつたけれども極めて質朴簡易の生活を營まれ其居室の唐紙なども悉く手

張りの上に更に自筆の書畫を粘り以て満足して居られた。從而机硯の類も實に廉末なもので而も平然として居られたのである。蓋し學問をするには真に之れて足るのである。だから孔子も惡衣惡食を惡む者は共に議するに足らずと示されてある。

又山陽先生と云へば誰れ知らぬものもない一般人の渴仰する學者であるから先生の所謂山紫水明處と名けられた鴨川の寓居の如きは如何に美麗優雅な所かと思ふと實際はほんに見すばらしい僅か六疊敷のもので平生自家の書齋として居られた處は僅二疊の極めて窮窟な者である。又吉田松陰の松下塾も此處からは維新の元勳たる雄偉な人物が輩出した處であるから定めし立派な處であらうと思ふと豈圖らんや極めて兪野なもので先生の居室と稱するものは。茅葺き家の二階と同然である。誠に今日の學校などに比較して見れば想像だも尙ほ及ばぬ程窮窟不完全なものであつたが而も一世の學者志士及び堂々たる維新の元勳は多く此處より生

れた是れ畢竟物質上の缺乏が却て精神を鞭撻練磨した結果であるまいか。かやうに考へて見ると今回の學校の様に物質上の完全にのみ腐心する事は如何はしい様に思はれると同時に各個人の生活上に於ても又同様で吾人は宜敷山陽松陰を師とせねばなるまい。

かく申せばとて吾人は決して今日の物質上の便利を更に用ゐず昔の不便に返れと云ふのではない、餘裕があるなら其れ相應に充實さして行くが善いが而も是れが精神的向上の忘れられた結果から來たり或は其れが爲めに精神的向上が閑却せらるる様な事があつてはならぬのみならず専ら精神的向上を主とせなければならぬと云ふに過ぎぬ。

吾人は一二年前明の高僧雲棲株宏の詩を録して雑誌に掲げた事があるが、各人が其詩を座右の銘としたならば決して衣食住に贅澤の心も起きま

いから今更に此れを掲げる事にした。

屋可蔽風雨、何苦闢華麗、堯舜古聖君、光宅天下被、茅茨未嘗剪、土墍亦不砌、不知爾何人、鱗々居大第、
食可充饑腸、何苦尚腴糜、孔顏古聖師、悅心飽義理、一簞復一瓢、飯蔬食飲水、不知爾何人、肥甘滿砧几、
器可足使令、何苦作淫巧、釋迦三界師、萬德備天藻、一持鉢多羅、四綴猶未了、不知爾何人、盃箸殿七寶、
衣可蓋形體、何苦競文飾、加葉首傳燈、聞譽千古溢、頭陀百結鶉、老死終弗易、不知爾何人、偏身皆綺縠、

九 光輝ある生活

意義ある生活、毎日する仕事、何等かの意味のあるものでありたい、そうして光輝のある生涯を送りたいと云ふのは、誰しも希望する所である。何人も心にも思ひ、口に出しても云ふ所である。然らば其意義のある仕事と

は何であるか、光輝ある生涯とは如何様のものであるかと云ふに、或は國家の爲になる仕事とか、或は社會に貢献する事業、此様な物は一寸考へると、非常に意味のあるものらしい。さうして、かゝる仕事をし、か様な事業に關係して、一生を送れば、光輝ある生涯の様に思はれる。之を倫理學者は自我の實現せられたものだ、と云ふ。如何に其人が貧窮の狀態に居やうが、社會が如何に其功勞を少く認めやうが、自我實現の生涯は、生涯其ものに意義がある。何等恨む所はない生涯、其自身の光輝は如何しても滅却しないから、と云ふ様な理屈を並べる。

成る程一寸考へて見れば如何にも尤である。自我實現的生涯を送れば、意義あり、光輝あるものと云へやう。社會の爲、國家の爲に盡すと云ふ事は、自我實現に違ひない。従つて意義ある仕事、光輝ある生涯と云つても、差支はないであらう。

然るに宗教的信仰の上から之を見ると、此様な仕事、此様な生活は眞に意

義あり、光輝あるものとは認められないのである、やはり夢の中で夢の仕事をして居ると同じ様な感がある、草木と共に朽ちる、之は苟しくも志ある者の恥とする所である。然るに前述の仕事、前述の生活は畢竟草木と共に朽ちるの類ではあるまいかと思ふ。勿論只自身の利益の爲に働き、己の我欲を充す爲にする仕事に比較すれば、光輝もあり、意義あるとも云へやう、後世に至るも其光輝は残存するであらう。けれども其謂ふ所の光輝とは、之を時間の上に計算して如何程残るものであるか、如何に功勳ありと云ふも利益ありと云ふも、何時迄残るであらう。千年萬年と云ひ度いが、餘程卓越して居るものでなければ、千年の壽命ある光輝を持つて居るものではない。まあ二百年三百年の間、尚光るものであれば、其て澤山として置かなければならぬ。大抵は二、三十年で影も形もなくなるものが多い。

今之を世界の歴史の上で調べて見るに、上古史に詳しい、或學者は次の様な事を云つて居る。即「世界に於ける古代の文明特にバビロンの文明の

如きは、段々研究して見ると、餘程進歩發達したものがあつた様である。今日よりも進んで居たかも知れない、汽車もあつたらしい、電氣を使つた跡も見える。今日我々が自ら稱して文明的機關と誇つて居るものが、此當時既に備つて居た、或は現代が一步を譲るべきだとも云へる様な形跡が見える。」と云つて居るが、其までに文明が發達して居たとすれば當然學問も進歩して居たらう。科學も發達して居たらう。哲學も今日以上のものであつたらう。と見なければならぬ。然らざればかゝる文明的機關のあらう筈がないからである。換言すれば、千古の眞理を發見した學者もあつたらう。萬古不易の卓説を案出した人もあつたらう。萬世を照す不朽の名著も出現して居たらう。そしてそうでなければならぬと思ふ。然るに之等のものが現在如何程残つて居るか當時の汽車も、電信も、水道も、一も残つて居ない。のみならず其使用して居た方法さへ今は解らぬてはないか。時代を劃する様な大作も、萬古に輝く眞理も、卓説も、義論も今は見る事が出来ない

てはないか。まるで煙散霧消で、只空々漠々たるものとなつてしまつたのである。例を近く我國にとつて見ても、奈良朝の聖武天皇の御代には、或方面は今日以上に發達して居たらしい、今正倉院にある遺物を見ても、其は解るが、正倉院にあるものはほんの一部分である。今残つて居ないものの中に、或は之以上のものが澤山あつたのであらう。之等のものは今日何等其形骸は愚か其名さへ聞く事が出来ない。只僅に一部分が宗教の力によつて今迄残る事が出来たに過ぎない。其他のものは無論發見者製作者の姓名さへ解らぬ。悉く一樣に煙散霧消してしまつたのである。

か様な事から考へて來ると、學者が千古不滅の眞理として發見したのも、夢の中。萬古不朽の大著述と稱せられるのも、一の夢に過ぎない、自我實現のときばつて居ても、其形も跡も消えてしまふ。況や其以下の事に於ておやである。如何に御金を蓄へやうが土地を所有して居やうが、如何に家屋を多く持つて居ても如何に朝から晩まで贅澤三昧に耽つて居ても、皆夢の中

の事夢の夢である。然らば畢竟如何なる事も深い根底と云ふ様なものは少しもない。意義と云ふ様なものは如何しても出て来ない。従つて、光輝と云ふも煙火の如きもので見て居る内に消えてしまふ。かやうに観じて来れば真に意味のある仕事は何處にもない。本統に光輝ある生涯は如何しても出て来ない。と云はなければならぬ譯である。心の奥底に極めて真面目に此様な事を考へて来ると、實に凄愴たる感じにうたれざるを得ないと思ふ。

先日も或所て或人から場所と姓名とは必要がないから云はない聞いた話がある。即自分は博士になるまではなりたいなりたいと始終希望に満ちて随分勉強をした、然し其博士になつて見れば何でもない。少しは貯蓄もなければならぬと思つて努力した。所が幸にて先我々に於ては充分と云へる程のものが出来た。けれども何も其が樂みでもなければ愉快でもない。のみならず時には其が爲に色々の心配種々な苦痛までが現れる。欲

いと思つて居た相當な家も出来たけれども、其中に居て特別安樂で仕方がないと云ふ事もない。十圓、二十圓の家賃を拂つて居た本の家と格別違つた事もない。かう考へて来ると世の中は實に張合がないもつと何か意義ある事もつとより多く光輝のある生涯を送れそうなのである。と思つた。然し己の心に満足する様なものは遂に見出し得なかつた。自分の心に充分だと思ふ程の光輝ある生涯は殆ど自分には送り得ない。望の綱が切れたと云ふ様な感じのする事となつた。さうして之を思ふ毎に胸中には一種の寂寞が満ち亘つて仕方がない」と云ふのであつた。

又一人の人は、相當に資格もあり、地位もあり、加ふるに御金もあれば田地もあるさうして、贅澤を盡して居たが、先日病氣に倒れ、遂に再び立つ事の出来ない破目に陥つた。最早全快の見込なしと云ふ所に至つて、其人が涙を流し、誠を込めて後悔話をした、自分は金さへあれば好い地位さへあれば好いと思つて色々計畫もし努力もした。さうして其は希望通り成功したけ

れども、今日となつて、此立場に置かれて、眞に身について居るものは一物もない。悉く身外の物を追ふて居た、所謂外物に驅使せられて居つたのであつた。其が爲に今となつては何物もない。今となつては仕方もないが實に悔しい。も少し早く気がついて居たらこんな馬鹿な眞似はしなかつたにあつた。と云ふ一大嘆聲を漏した相である、か様な事はあながち此人にのみ限らない。誰しもある事である。又なければならぬと思ふ。

眞に意義ある仕事。眞實の光輝ある生涯とは何ぞや。然らば眞の意義ある仕事。眞の光輝ある生活其が此世の中に存在するか、と云ふ問題が起る。それはある。確にあると私は答へる。佛敎の信仰の上に立つて見れば、只に眞意義のある仕事のみならず、萬古不滅の光輝ある生涯を送る事が出来るのである。即自身は不生不滅のものであると云ふ所に到達して來れば、一切の事業皆悉く本性と共に不生不滅である。現象界にのみ執着して居る所から見れば、百年間の光輝、千年の壽命ある仕事生涯もあるであらう。

然し之等も畢竟は消滅して其影さへなくなるのである。不生不滅の本體から眺むれば如何なる事柄も消失する事はない。萬古末代まで自分のした事は皆己に向つて用をするものである。

之を眞宗の信仰上に持つて來ると、我々は佛の慈悲によつて無量壽の果體を悟る事が出来る。其無量壽の果體に於ては、現在爲した事が何時まで経つても消えるものではない。還相廻向をする毎に前に置いて置いた仕事、其働を現はして來るものである。之を見ると百年千年は愚萬古不滅のものである。そこに眞に意義ある仕事と云ひ得る。千古萬古不滅の光輝を放つ生涯が出て來たと云へると思ふ。仍て初て之まで外物であると思ふ。居つたものが皆心内の物となつて來るのである。

自分がかねてか様な感じがあつた。爲につまらぬながら一の詩を作つた事がある。

草木同腐洵可耻、人生須帶個光輝、功業千載垂青史、舉世誤認做光輝、

寧知青史歸劫火、茫々何處着光輝、吾有宿緣夙歸佛、命終當證妙光輝、
照耀十方貫三世、是我人生真光輝、

詩としては無論價値のないものであらう。自分は只浮んだ思想を詩に作つたばかりである。

要するに佛敎の信仰に安住して未來無量壽を證得する其處に至つて初めて眞の意義あり、光輝ある生涯と云ひ得るものであると思ふ。之を除いて外には一切の物皆夢中に騒いで居ると同様である。平常は五欲の煩惱の爲に紛らかされて、夢を夢とも思はず、何時迄も迷ひ彷徨て居る、然し一度眞面目になつて己を考へて見る時になると上に述べた病人の様に一大痛嘆を漏さなければならぬのである。誰人も反省一番すべきである。

一〇 人生の意義

能く世間の人が人生の意義と云ふことを謂ふが人生其のものに意義が

あらう譯は無。世間の學問上からさう云へるかも知れぬが、佛敎から云へば人生五十年は自身が前生に於て爲した所の業力の影子に過ぎないのである。意義の無いものを自身の心得て意義あるものにして行かねばならない。自身の心得方によつては人生總ての事一つの意義のもとに統轄して行くことが出来るのである。それが無いと云ふと前に云ふ如く人生は何等意義無きもの考へれば考へる程分らず、思へば思ふ程取りとめの無い眞に夢の中に於て夢の仕事をするが如きもので、何事にも少しも價値ある事を認めることが出来ず。其の結果生きて居る所詮が無いので、巖頭の感を書いて瀧壺に入るやうなことになる。又悪い方の側になると自然主義に陥らなければならぬ。今日の人は多く自然主義の方へ陥るのである。

斯くの如く何事を考へて見ても幾ら眺めて見ても取りとめも無ければ頼りにもならない全く譯の分らぬものになつて仕舞へば人間は犬猫と異

つた事は無い。謂はゞ裸蟲故、何も斯うしななければならぬ、彼せなければならぬと云ふ事はない。自分の勝手をして食ひたいものは食ひ、やりたい事はやり、何でも都合よく通りさへすればよいのであるといふ様に考へて來ることになる。今日の多くの人間は、心の奥底を能く探つて見たならば、皆さうなつて居りはせぬであらうか、萬物の靈長と云ふ事は無くなつて、動物じやと考へて居るのかも、しれぬ、其の末は即ち彼の自然主義に墮ち込ひの外、他に道はない、憐むべき又悲むべきものである。

然るに深い信仰が出來て見れば、如來の大慈悲を感じて身に泌みだ歡喜が胸の裡に湧いて來る。從て此の大神を報謝せずには居れないと云ふことになるから、乃て人生五十年は報恩の生活と云ふことになつて、是に初めて人生の意義が出來て來る。御恩報謝の爲に世送りをするのであると云ふ事が分つて來る。金を儲けるのも、職業を勉強するのも、御恩報謝である。家を治め、子孫を教育するのも、御恩報謝である。何から何まで報謝の仕事

をするのであると云ふ事になる。一口に云へば人生は報謝の爲である、と云ふ一つの意義の下に、萬事を統轄して行く事が出來る。人生其ものには元來價值のあるもので無いけれども、報恩の生活なることが分れば、人生其ものゝ上に價值を認めて行くのでなくて、佛の命令と云ふものが非常に大切になる。其の命令を遵奉して日送りをするのが吾々の生活である、と云ふことになるから、價值の無い人生を價值が無いと云ふて粗末にすることが出なくなる。何から何に至るまで、落度の無いやうに、抜け目の無いやうに、益々其の事柄の善くなり、發達するやうにせねばならなくなる。夫れて初めて眞の國家の仕事も、社會の仕事も、出來る譯である。

信仰の無い人は、兎角人生そのものを價值あるものと認め、財産や名譽を極めて大切に思ひ、自身の地位が最も價值あるやうに考へる。そこで其の慾に括られる慾に括られる故、眞に國家の仕事、社會の仕事が出來ないで、自分の事ばかり考へることになる。國家の大事の場合にも、社會に何んな事が

起つても其の財産や地位を抛て國家社會に盡し生命まで投じて犠牲にすることは出来なくなる。只々自身の持つ居る財産地位を擔いて逃げ出すことになる。

前に云ふ通り人生には價値が無く、財産も頼みにならず、名譽も地位も眞の價値あるに非らず、人生の有ゆるものに對し世の中の仕事に、價値なきものと見くびりて終ふて只佛の命令を重んじ、此の價値の無いものを大切にせよとの佛の命令を遵奉するが人生の上にて於ける意義であるといふことに至れば世界の仕事に慾が着かぬ。財産や生命や名譽は固より無價値と見限りたれば、そんなものに執着はせぬ、若し一朝國家に大事あるときは潔く、是等を擲て盡すことが出来るのである。

乃木大將の書かれたものの中に、
退て其廉を守ること能はず、是を以て進て其の節に死すること能はざるなり

と云ふ語がある。之は古人の語か、大將の語か深く知らぬが、兎に角大將の書かれたものの中に在つた。是が前に云ふた事と同じ意義であると思ふ。廉とは無欲の事、財産や地位にうるさい慾が出ぬ。それに括られない。それで初めて一旦緩急ある時は進んで生命や財産を抛つことが出来るのである。其の無慾になると云ふことは、人生の萬事に眞の價値があると思へば無慾になれぬ。無慾になれぬ以上は其を打すて難いので、執着がついて廻り、之を打放すことは出来ない。

然る處報恩と云ふ立場から財産も名譽も生命も能く觀じれば一文の價値もなく執着もないが併し如來は其の無價値なものも疎かにしてはならないぞ、仕損ひの無きやうに、手落無き様に、各々其所を失はず、氣を附けて自身の生活をせよと仰せられる。其の命令に重きを置き、其命令の下に日頃の生活を營むことになれば眞に慾を放れて國の爲、社會の爲に盡すことが出来るのである。依て人生の眞の意義を得る事は信仰の上に立て、何事も

佛恩報謝といふ所に心を置いて往くのでないと、人生の眞の意義を認めることは出来ぬことと思ふのである。

一 國民道徳と宗教

今日世上の事を考へて見るに、何から何迄矛盾な事ばかりのやうに思はれる。云ひ換へて見れば不調和な事ばかりのやうに思はれるのである。これは今日の如き過渡時代には免るべからざる事であらうが、先づその一二の例を擧げて云つて見ると、第一に教育と法律との不調和或は一般國民の思想と従來の國民的道徳といふものと少しも調和して居ない事である。今日日本一般の人間は總て西洋風の思想になつて居る。即ち總ての事に向つて權利義務ばかりを考へるやうになつて居る。法律等も西洋の法律を斟酌して制定されたものであるから、やはり權利義務的のことばかりである。然るに従來日本の國民道徳といふものは教育勅語に表はれたる通

り忠孝の二つが根本になつて居るそれ教育に於ても國民道徳の邊に於ても勅語を根本としてその精神を布衍して居るのである。然るに權利義務の考へは眞實の忠孝といふ事が出来るわけのものではない。忠孝といふものは、自分の心の誠が君に對ひ親に向つて發したるもので、たとひ自分の生命がなくなつても、たとひ自分の財産がなくなつても親のため、君のため、そんな事を顧る餘裕なく、何事を犠牲にしても仕なければ居られないといふのが眞の忠孝といふものである。權利だの義務だのといふ事を考へて居ては到底出來るものではない。それは平日無事の時ならば斯うかうするの親たり君たるもの、權利であり、斯くあるのが子たり臣たるもの、義務である、といふやうな事を云つて居ても通つて行くが一朝事ある時、君が君たるの義務を果たさず、親が親としての義務を果たさなかつた場合、に於ては子たり臣たるものは最早義務を果たす必要がない事になつて、忠孝の實が茲に滅びて仕舞う。是れを咎める時は法律に訴へる。法律は

矢張權利義務から成り立つて居るものであるから何にもならない。斯ういふ風に國民一般の頭にある思想と今日教育の上にて奨励して居る忠孝の道徳とは調和して居ない。恰度圓いものに四角な蓋をするやうに授ける敎へと受ける頭とが調和して居ないのが今日の有様である。今日國民道徳不振の聲が到る所に聞えるのも自然であらうと思ふ。斯んな有様では國民道徳が振ふわけがない。將來に於ても今日のやうな事情では發達する理由がない日を経る毎に益々振はなくなるであらうと思はれる。是れに就ては宗敎家政治家敎育家が等しく頭を悩まして居るのであるが、まだその不調和矛盾を取去る名案を聞かない。

不祥な事ではあるが、是れを過激な言葉に代へて云つて見ると精神界の方では、日本は今日歐米各國から大兵を以て襲はれつゝあるのである。そして敗北に敗北を重ね、益々その領分を蠶食せられてゐるのである。日本殊に青年の思想は歐米の思想に囚はれ、蠶食され、冒されて居る。然して冒

す方の歐米の勢力は非常なるものである。斯う考へて見れば實に寒心に堪へないやうに思はれる。右は唯一般國民の思想と國民教育との不調和の一端を示したに過ぎないが、その他の方面に於ても殆んど矛盾不調和な事ばかりである。嘗て世間の事柄のみに限らず、自分々の精神上に於てよく考へて見ると、驚き入るばかりの矛盾がある。これは誰れの上にもある事であらうと思はれる。

吾々の知識の側から考へて見ると、世の中は日に月に變つて行く。是れは日本ばかりでなく、支那には昨年來の大革命があつた。是れは支那人民の頭の中の變化から起つたのである。東洋ばかりでなく、ヨーロッパに於ても、殊に最も秩序ある國と稱せられて居て、この國に限りては社會主義などの起りやうはあるまいと迄思はれて居た英國に於て、非常な大きな同盟罷工が起つて上から下まで是れが爲に頭を悩まされたと言ふ始末。其外英國婦人の上にも變化が起り、所謂婦人參政運動となり、警官に抵抗し、官衙

の硝子を打ちくだき、宰相迄が婦人のために虜にされて困つて居ると云ふ有様である。

そんな事を考へて見ると、何につけてもこれ迄のやうな考へては到底可けない。是非共大なる變化に應じて行く頭が要る。政事に於ても、宗教に於ても、又教育に於ても、その他萬事に於て、今迄の考へては駄目である。今後世運に乗じて發展して行くには更に大規模の考へが入る。是れを一軒の家に就いて見ても、親子夫婦兄弟が手近い所に住んで居て、節句だとか、お祭りだとかには一緒に會して歡をつくす。又先祖傳來の家や田地を固く守つて、子々孫々に傳へて行くこと云ふやうな事は到底これから出来ない事になるかも知れぬ。是からの日本人はどしどし外國へ出稼に行かねばならぬ。北アメリカ南アメリカ、オーストリア支那の奥迄働きに行かねばならぬ。今迄のやうに親子夫婦兄弟が一里か二里離れた所に居て、時々寄り合ふと云ふやうな呑氣な事は出来ない。先祖傳來の田地を孫子の末に

傳へる事も出来るとも出来ないとも判らない。これから先のものはその小さな事に屈托しては居られない。天地を以てわが家とし、世界を股にかけて働くといふ意氣がなければならぬのである。

こんな事はよく解つて居る。誰れでも知識の上では善く承知して居るのである。さうして居ながら小さな家を大切に守つて親の残して行つたものをいつ迄も手離さずして是れを子孫に傳へて行かうとするやうな人は何んだか道徳家のやうに思はれるし、生れ在所と親の家とを捨て、餘所へ行くと何んだか不道徳なやうに思はれる。知識の上では飽く迄も世の變化に應じて變らなければならぬと思ひ乍ら矢張昔流の事をコツ／＼やつて居る人を見ると何となくつかしいやうな氣がして道徳家のやうに思はれ、少しも突飛な事をやると不道徳家のやうに思はれる。是れは個人々々の頭の中の衝突である、矛盾である。

然し乍ら斯くの如く衝突不調和のある間は未だ充分の開明には到らな

いのであらうと思ふ。これが不調和のない所迄到らなければならぬ。矛盾不調和の全く無くなるのは何時の事か、それは解らぬが、矛盾不調和はありかちの事であるといつて捨て置いてはならぬ。吾等は何處までもこの矛盾を脱却する事に努力せねばならぬのである。

宗敎の上にも矛盾不調和の事が多い。例へばある一つの宗旨の政策といふ上に就ても、それが一般末寺の僧侶の頭と調和せぬ事が多い。是れ度々紛擾が持上がるのである。或る宗旨では政策の方が進んで門末の頭が之れに相應しない、或る宗旨に於ては時代遅れの政策が門末の進んだ頭に調和しない。何れにもせよ、此の不調和がある爲めに攻撃が起り、紛擾が起るのである。

て、何うしても不調和を調和し、矛盾を取去つて行かねばならぬのである。が前に申した國民的思想が、一も權利、二も權利といふやうになつて居るのに、忠孝の聲を高くして叫んで見た所、何にもならない。是れは何うし

ても是の不調和の原因を研究し、それを調和する方法を研究せねばならぬのである。

要するに今日一般の日本人別して當時の青年の頭に親の恩君の恩を感ぜしむのが第一着である。眞に親を有難いと思ひ、君を有難いと思ふ心さへあらば期せずして忠孝の教は實現されるのである。權利義務の考へては、何うしても是の有難いといふ感じは起り得ない、權利義務の教によつて忠孝の實行を期するのは砂を掘つて油を得ようとするに等しい。

然らば何うすれば現代の人をして親や君を有り難く感ぜしむる事が出来るか。自分は宗敎の信仰による外はなからうと思ふ。宗敎の内でも佛敎でなくてはならぬ。外の宗敎では到底出来ぬ事である。我々は思ふのである。日本現時の思想界の危機を救ひ、國民道徳を發揮するには佛敎の信仰を盛んにする事が第一の良策であると自分は信ずる。

一一一 成功病の解熱劑

清涼劑なるものは、直接人間の肉體に効能のあるものではない。例へば寶丹の如く、此れを用ふれば胸の悪い時に胸がさがり、氣分の悪い時に氣分が開けると云ふ位いなもので、然う大して効能ある程のものではない。けれども亦此れが無くてはならぬ、寶丹が現に世に行はれて居るのも此の所以である。今話す話も直接教育の上、著しい利益があるてもなければ、修養の上に格別の効能があるてはなし、又成功の上、非常な助けとなるのではない。併し此れは所謂精神上の清涼劑で、時々用ゐなければならぬ。此の種の話は、素より直接に効能はないけれども、間接には必ず幾らかの効能のあるものである。元祿頃に禪宗の和尚で、桃水禪師と云ふ人があつた。此の人の事は近世崎人傳中にも其の一部分が出て居るから、然う珍らしい話ではなく、大概の人は知つて居るが、其の詳傳を京都の或る友人から、

先月態々一部送つて呉れた。近世崎人傳に比較すると餘程詳しいもので、讀んで行くうちに、大變面白くも感じ、此の清涼劑を得て、胸の中がスウと開ける心持ちがした。全體を話すわけには行かぬが、面白い所を二つ三つ話さうと思ふ。

桃水は諱を雲溪と云つて、筑後柳川の生れ商人の子である幼年の時分から佛縁の深い人で、七歳の時に肥前圓應寺の圓岩和尚に就いて出家した。

此の圓岩和尚は常に弟子を誡めて曰く「沙門は五欲を離るゝが肝要であるとは釋尊の誡めてある。五欲とは色欲、食欲、睡欲、名欲、利欲である。初めの三欲は少しく心を用ふれば離れる事が出来るけれども、只最も離れ難いのは名欲と利欲の二である。此れは餘程修行の積だ人も六ヶ敷い。汝等も能く此の邊に注意して修養せよ」と、此を聞く一般の弟子達は非常に感服して居たが、其の中、桃水單りは「和尚は一寸した事を何でも入釜敷く云ふ。其の位の事は何でもない」と嘯いて居たと云ふ。此の一事だけでも桃水禪

師が壯年時代から普通の人でなかつた事が知れる。禪師壯年の頃は善知識と云ふ善知識には何處までも参見したものである。最後には肥前の禪林寺の住職となつたが、寺は時の國主の立た大寺で早く云へば結構な位置に据つたわけだ。此處に五年程居た。五年目に冬安居が催され、百二十人からの雲水が集つて居たが、安居も愈々濟んだ日、大衆は揃つて和尚の元へ暇乞に出掛けた所が和尚は何處へ行つたものか皆目姿を見せない。能く能く見ると、白紙が門に張り付けてあつて、其れに「今日解制、大衆送行、老僧先出、東西任情」と書いてある。さあ和尚が逃げ出したと云ふので、大衆は騒ぎ出し、四方に人を馳せて行衛を探させる、檀那なる國主も大に驚いて、其の所在を求めた。けれども其れ切り遂に解らなかつた。

桃水其後は居所を定めず、乞食をしたり、荷物擔になつたり、迎も常人には真似の出来ない種々な事をして、諸處方々を彷徨うた。其間の面白い話は誠に胸のすくやうな心地がする。近世崎人傳中の、大津で馬靴や草履を作

つて生活して居た時の話などは極めて味がある。其の頃桃水は藏と藏との間の狭い場所を自分の住家として寝起して居たが、無論其の住家には佛壇も無ければ佛様もない。其處で近所の人が氣の毒に思ひ、大津繪の阿彌陀様を持つて、與つたが、桃水は悦ぶかと思ひの外、膝も容れられんやうな狭い所へ、恁麼ものを持つて来て」と小言を云つて居たが、或る日桃水の居ない時に、私かに其の住家を窺つて見ると、藏の壁に大津繪の阿彌陀様が懸けて、其の上に一首の狂歌が書き附けてあつた。

狭けれど宿を借すぞへ阿彌陀殿後生頼むと思召すなよ。

此れも桃水が大津に居た時の話。其の弟々子に雲歩禪師と云ふ人があつたが、此れ中々の大徳で、當時細川公の歸依を受け、其の菩提寺の和尚となつて居た。細川公が江戸詰となつて江戸に居た某年のこと、江戸に居ても佛法が聴きたいと云ふので、雲歩に上京を乞うた。檀越の乞てあるから、雲歩は直ちに上京する事にし、供を連れて堂々と東海道五十三次を道中した

わけだ。一行が大津を通つた時、雲歩の籠舁共が足を休めて一服して居ると、其處へ六十餘りの白髪の老翁が馬靴や草履を擔いで賣りに來た。馬子や籠舁共は「一足呉れ〜」と云つて其れを買ふ。雲歩が籠の中から善く善く見ると、其れはどうやら桃水らしい。兼ね〜此の邊に居るとは噂に聞いて居たが正しく彼れに違ひないと喜んで其れへ飛び出し、老爺の前に禮して云ふには「貴老は桃水和尚てはありませんか、斯く申す私は雲歩で御座ります。貴老の姿にどうやら見覚えがあるやう心得ます」「如何にも俺は桃水じゃ、お前は雲歩に違ひないが一體何故此處を通るのか」と桃水が訊く。雲歩は「此度細川公の御召しに預りましたので此れから上京致します其の途すがら貴老にお目に掛つて此程嬉しい事は御座りません」と謂つて涙をこぼす。すると桃水の云ふには「其れは結構じや。俺は今乞食で御覽の通りの姿ぢやが、恥しい事は何も無い。併し二度とお前に會ふ事は六敷からう。身を大切に何時までも壯健で居て呉れ、細川公の歸依を受けて

居るからは、主人持も同様の御身分ぢや御機嫌を損ぜぬやう、随分と大切にさつしやれ」と云つて分れたと云ふ。
私は此の話は實に面白いと思ふ。雲歩は大名細川公の歸依を受けて、供を連れて道中をして居る。謂はゞ僧侶最上の名譽ある位置に居る。其れに對して桃水は乞食同様の姿をして居て併も俺は乞食をして居ても恥しくない、主人の機嫌を損ぜぬやうにと云つた其の言葉は、今日成功の事ばかり考へて居るものに對つては、眞に一服の清凉劑であると思ふ。位置が何程高くあり、月給が幾ら多くつても、畢竟するに主人持である。主人持でないにしても、成功ばかり望んで居るものは、他人の鼻息を窺つたり、機嫌を損ぜねば好いがと云ふやうな事のみ氣にして行く。桃水の方で見れば、自分は食ふものも食はず、着るものも着ない乞食同様の身ではあるけれども、精神上には微塵程も足らぬものはない。精神上の大富貴を極めて居る。大津繪の阿彌陀様の上に書いた狂歌でも知れる。桃水は佛様さへ對手にせ

位天地を一呑み所謂宇宙を籠絡するといふ鹽梅式である。斯くあつて見れば名譽も利益も要つたものではない。實際人間は茲まで行かねばならぬものだと思ふ。財産や名譽が何程得られたからとて如何に成功したからとて御主人持と云ふ其のつらさは恐らく乞食以上であらうと思ふ。

一三 偶感五則

いつも七月初旬から九月の初旬頃まで地方を巡遊して講習會とか講話會とかいふ所で話をするのであるが、何分大暑の眞最中とて随分苦しくもあるが、併し所が變り相手が代りまた時にはもの珍らしいことなどを見聞するので、それが非常に精神上の慰藉となるのである。本年は少し都合上七月二十日頃までは家に居り、久し振りに東京の夏をするのである。東京は随分暑氣は酷しいが、終日風の絶間がなく、比較的凌ぎ易い方である。殊に未明に牀を出て、杖を不忍の池に曳いて蓮を愛で、そちらで朝食を喫し

て歸宅するなどは、大に興味あることである。かくして居ると却つて地方に出るのが億劫のやうな氣がする。要するに人は心掛一つで味へば興味の如きは随所にこれを得られるものと思ふのである。

これまで余の家では慈善新報といふ新聞を、家内や子供等に讀ませるためにとつて居た。所がその社では窮民や孤兒に恵みたい、故金錢でも米穀でも、その他浴衣の古着でも襦袢や足袋の廢物でもよいから、いらぬものがあれば何んでも施して呉れといふので、家でもそれ等を探し出して二三度呉れたことがあつたが、近來また救世軍からも同様の事を申し來つて、金錢米穀古着はいふまでもなく、たとひ破れた傘でも損じた水瓶でもよいから、窮民のために恵んで呉れといふのである。余は考へるに、若し斯様にして一軒々々貰つて廻れば、たとへ廢物とはいへ、随分澤山集まることであらう。それが悉く願たれることになれば、窮民や孤兒にとりては非常な恩恵を蒙ることとて、結構はいふまでもないが、併し、かくして廢物を悉く寄贈してしま

ふ、一方に於いてそれがため、非常に困ることが出来はすまいかと思ふ。といふものは、我家人は、たとひ着れないといつて打捨つた古浴衣、古襦袢でも、これがあれば、或は下婢にやることも出来やうし、或は出入の人々に頒つことも出来やうし、また時によると、近所近邊へ小兒の襦袢の料として與へることも出来やう。且つ傘のこれは、足袋のやぶれの如きは、これを屑屋にやれば、彼は紙屑以外に、餘分の利を得ることとなる。然るにそれを救世軍等へ出すと、下婢、下男、出入の者が恩恵にあつかれぬのみならず、正業に従事して居る屑屋の營みを助けることも出来なくなる。してみると、たとへば廢物と雖も、悉く一方へ施すといふことは、考ふべきことと思ふ。元來世間で一番困窮して居ると稱するものは、如何なる境遇のものかといふに、表面窮民と打ち出すものではなくつて、却つて表面は通常に裝うて、内實困窮して居るもので、所謂中等中の下等の境遇のものと思ふ。且つこの前にも話した如く、物には餘裕といふことがなくてはならない。家の内にも、今直接必用

の認められない廢物の如きでも、貯へて置くといふことは、肝要なことである。何ものでも何事でも底まではたき盡すといふことは、大に謹むべきことと、余は思ふのである。

近來は種々な名義種々な手段で寄附金を強請するといふことが行はれる。これもある側から考へると、あながち悪いとはいへない。例へば村の神社の廢類せるを修復するといふが如きはよしや強請的でも、立派に出来れば悪いとはいへない。また一の公共事業に、金のある家へ強ひて依頼して寄附を仰ぐといふ類は、強ち悪い譯でもないが、中には寄附金を無理に頼むのみならず、恐迫的手段を敢てする如きがある。それ等に至つては、言語同斷といはねばならぬ。併しながら、古の人々が寄附を募るのと比較してみると、今日のは實に厭ふべく惡むべきやり方といはねばならぬ。彼の重源大徳が、奈良の大佛建立をするために、一輪車を驅つて諸國を勸進するの、少しも人に寄附金を強ふるといふことをなさず、人が隨喜して金を出

すのばかりを集められたといふことである。實にその募集の仕方が清淨潔白であつた。凡て神社佛閣の寄附はかやうな風でやりたいものである。所が今日は如何なる所にも、そんな清淨潔白のやり方はみることが出来ないが、いかにも遺憾な次第である。潔白といへば、僧侶の托鉢は實にこれこそ、潔白の一つといはねばならぬ。家の前に立ち留るといふことなく、唯表通りを偈文を誦しながら通るばかりであるに、供養せんと志すものは自ら喚んで金錢米穀を施すのである。今日はこれに類するものが殆んどないが、余は、一つ按摩がこれに似たものと思ふ。先日も盲人會の席上で話したことである。世の中に何が清淨の職業といつても、按摩位清淨なものはない。夜中大道を流して歩き、強ひて追らず、人の依頼に應じてその家に趣き肩や腰を揉み、それで生活する。今日教育家でも宗教家でも、これを商賣人や政治家等に比すると、いくらか清淨であるけれども、嚴密にいふと、共に、我が勞力を費さずして、只て報酬を貰ふのがいくらかあるが、獨り按摩に

至つては、人の肩や腰を揉まらずに金を貰ふといふことは決してない。それからみると、今日と雖も、按摩だけは清淨な金で生活して居るものといふことが出来る。實に按摩は人生の大幸福者といはねばならぬ、と話したことがある。

寄附金の強請から思ひ出したが、近來はまた高等乞食が非常に殖えた。それは如何なる類かといふに、一例を挙げると、新刊の書籍を持參し、御覽置きを願ひたいといつて置いて行く。余が家では時々友人や書店から新刊の書を貰ふので、それと同様に思つて封裝を破つて一二枚讀むと、中に一通の手紙があつてこれを見本に差上げるから、是非購讀を願ふ。代價はその内頂きに上るといふやうな文句が書いてある併し、一度封裝を破り、表紙に折り目を付けると、その盛返戻も出來ぬので、止むを得ず買はねばならぬことになる。先日余は、玄關に立つて居ると、それがやつて來て、一冊の書籍を置くので、斷らうと聲をかけると、彼は耳をも借さず、書籍を投げ置いて逃げ

て行つた、これ等は、風の變つた一種の乞食といふべきである。その他新刊の雜誌や新聞などにもよくこれがある。これ等の如く、人に頭を下げないで、金を貰ふものが非常に多くなつた。心あるものは、これ等に向つて何とか制裁を講じて貰ひたいものである。

一四 内を充實せしめよ

余は、本年は七月十一日に東京を立ち、岡山、廣島、山口、佐賀、福岡、兵庫の諸縣及び大阪府を巡廻し、九月三日に歸京したことがあるが、幸に行く先々が好天氣で、所によつては随分暑さが酷しかつたが、關東北國の諸縣のやうに水災に逢はなかつたのは、何より結構であつた。總體何れの地方でも、近來は宗教並に道德上の講話は、人が好んで聽きに來るやうになつた。中にも各地の小學教員中には、宗教の熱心な人が大抵到る所に一人二人はなかつた所がない。以前は、こんな様子とはとてもみることは出来なかつたものであ

るが、此處二三年この方傾向が一變したのは、誠に喜ばしい現象といはねばならぬ。殊に今回の如きは、小學教員は更なり、鐵道郵便局員等の熱心家から、かういふことを聞かされた。「我々は、宗教の信仰を起してからといふものは、自己の職務が氣樂に勤まつて來、學校の如きも、信仰の上から生徒に向へば、生徒がよく教を奉ずるやうになり、郵便鐵道局でも、同じく信仰の上から指圖すると、部下が悉く忠實に職務に従事して呉れて、管理上非常に都合がよい。これ等は他人の事であるが、第一自分の心持が違つて來た。即ち、以前は萬事に就いてともすると、不平や不満が起つてならなかつたけれど、一度宗教的信仰を抱いてからといふものは、どんな職務にも満足して従事されたといふ薄給であらうが、それに甘んじて元氣よく仕事が出来るといふなり、他人の身の上を無暗に羨んで煩悶するといふことがなくなつて、精神が非常に安らかなになつた。」という居る。これは正に然あるべきことで、何も驚くべきことではない。佛教中ても、別して真宗の如き、絕對他力教では

一度信心を佛陀から頂けば、萬事が歡喜感謝の想てやつて行かれ、たとひ貧賤病苦に逢ふことがあるにしても、それを忽ち大悲善巧の御手廻しと喜ぶことが出来るのであるから、吾人は右に述べた話の如く、生徒や部下の管理が甘くやれると否とに抱らず、信仰の上から人生をば愉快に暮して行くことが何より肝要なことである。

話は變るが、余が先般巡廻中河内に一週間講話をした時、利井明朗老師も、遠路攝津から來られて、お話をせられたことであるが、余は老師とは久し振て色々語つたが、中に、老師はこんなことを話された。余はそれを非常に味ある話と聞いた。即ち、老師は「明治七八年の頃であつたか、融通念佛宗の管長に、秦義勵師といふ人があつたが、この人はちよつと風變の人物である時、私が京都に居た時やつて來られ、「私はこれから大谷派の法主に忠告致しに行くのだが、お前も一緒に行くてはどうだ。」といはれたので、私は義勵師と一緒に、一緒に行つた。所がその時私の思ふには、義勵師の忠告といはれるのは、定

めし、法主に、今日は以前とは時勢が違ふから、始終御殿にばかり引つ込んで居ないで、ちと平民的に巡錫でもして、末寺や門徒を教化なされては如何とでもいはれるのであらうと思つた所、愈々師が法主と御對面の上で話されるのを聞くと、これは驚いた。師は「近來承る所によれば、貴派でも、貴方が門末を教導するとて、親しく御巡錫なされるといふことであります、それは甚だ以て宜しく御座らぬ。一宗一派の管長たるものは、やはり以前の如く、始終本山に在つて、御眞影を大事に御給仕なさらねばいけません。それに、貴方のやうに、近來、御親教などいつて、自から大勢の中へ出て、御説教などをなさるといふのも、これまた至極宜しく御座いませぬ。管長は、以前の如くお言葉をば他人に書きとらせ、御直論として、役僧に持て廻らせればそれでよろしい。私は決して悪いことは申しませぬから、自後は斷然お止めなさいませ。」といはれたのであつた。

その後、國會が開設になつた當時、本派では、藝州選出の門徒で、貴衆兩院議

員となつて居るものを東京築地別院に招き、法話を聞いたことがある。その時、法主も御臨席にはなつたが、法主ばかりでは淋しいといふので、廣島の舊藩主、淺野侯をも請待し、法話後、饗應の宴を催したことがあるが、酒も漸く酣ともいふ頃になるや、代議士八田謹次郎氏が「かずかず」と法主及び舊藩主の前に罷り出て、「今日は誠に難有い御法話を聴聞させて頂いた上、法主、下並に舊藩主閣下の御臨場の前に御馳走に預るとは、實に拙者に於てもこの上なき光榮と存ずる次第であります。この由を拙者の父が聞いたなら定めし歡喜致すことであらうと存じます。就きましては、猥下並びに閣下の御杯を頂戴致し、紀念として父へ持ち歸りたう御座います。」といつて、法主及び舊藩主から二個の杯を貰ひ、非常に満足の體であつたが、暫するや、氏は進んで先づ舊藩主の前にかしこまり、「御殿様私は貴方に御願が御座います。他でも御座いませぬが、御殿様には、どうぞ拙者の願を容れ、御國へ御歸り下され。拙者は、貴方が御歸り下さらば及ばずながら力の限り、御助申し

上げます程に、どうぞ東京をば引き揚げて、早速廣島へ御歸りなされて下され。いと涙をほろ／＼流して申し上げ、更に今度は法主に向ひ、「御門跡様どうぞ拙者の申上ぐる言葉を御取り上なされて、一刻も早く京都に御歸り下され。そして、これから以後は、東京なぞへは度々入らつしやらないで、御眞影様の御給仕をなされて下され。拙者は、貴方の御出歩は甚だ以つてよろしくあるまいと存じます。」といつて、是も同じく、落涙しながら申し上げたことであつた。それから次には、江州眞福寺のいはれたことである。或日一人の信徒が、御法主の御親教を拜聴して歸り、御聲が非常に小さくて、隔々まてははつきり聞き取れぬと云ふた。すると眞福寺が、「見て御座れやがてあの御親教が聲が大きくなりて、隔々まて聞える様になるぞ」と云はれた。右の三つの話は、事柄こそ違ふが、譯合に於いては全く同じことである。が味つてみると、成程と思はれる所がある。」と、利井老師は話されたことであつた。

これは老師が一場の茶話に過ぎないが、余は、これを非常に面白く思つて聞いたのである。併しながら、今日の成行からいふと、あながち何れの宗派でも深く殿中に籠つて居て、御消息を役僧に持て行かせるに止め、自分では一席も親教を垂れて末寺門徒を教導せぬといふ譯には行くまい。また満堂の聴衆に向つても以前のやうに蚊の鳴くやうな小さな聲で話をしてそれによいといふ譯には行かぬに違ない。近來聞く所に依れば某派の法主の如きは極めて平民的に、且つ信仰的に末寺門徒に向つて御親教なされ、東奔西走、殆んど席の暖まる暇がないといふことである。これは至極結構なことに違ない。余は、これらをよろしくないといふてはない。否、寧ろ大に稱揚するものであるが、これを稱揚すると同時に、前述の利井老師の語、即ち内に籠つて自行を怠らぬといふことも、また忘れてはなるまいと思ふ。右は、法主等、一宗一派の管長ばかりではない。たとひ小寺院の住職でも、この両面は常に具足すべく心得て居らねばなるまいと思ふ。

ある人がいつたことがある。「私共の村では、真宗の寺院もあるが、その他に、眞言、淨土等の寺院も混つて居る。而して昔は、お説教といへば獨り真宗寺院に限られ、他では曾て一度もなかつたものであるが、近來は、何れの寺院でも月に一、二回のお説教はないのはない。併し以前御説教は無くても、毎日朝夕の勤行が規律正しく行はれて、鐘や木魚の聲が年中一刻も違はなかつた時の方が、月に一、二回のお説教はあつても、勤行等の規律が亂れて、ともすると鐘や木魚の聲がと絶えるといふ今日よりは却つて村民の信仰をよく繋いだものだ。」といつたことがある。「全く今日の佛教は、傳道の佛教演説の佛教となつて居るが、宗教といふものは、傳道や演説ばかりでは、決して人が信仰するものではない。どこまでも、これが任に當る僧侶は、敬虔の念を以つて、先づ我本堂の御本尊を崇め、僧侶は僧侶のあるべきやうに、恭敬禮拜等の自行を、一日も缺げないやうに勤修することに努めねばなるまいと思ふ。」

一五 心の掃除

自淨其意と申すとは、佛敎に在ては最も大切なることであるが、即ち心の掃除である。人間と云ふものは表面が何程美くても心が清潔でないといふ人間ではない。お互の心には常住塵芥のたまるもので、塵芥がたまると遂には微菌が発生する、夫れから心の大病を惹起すやうになる。であるから其大病を發する前に豫防法として先づ心の掃除をすることが大切である。どんな家でも朝起ると必ず室内の掃除をする。毎朝する掃除の爲めに大した塵芥もたまらぬのであるが、尙それでも疊の隙とか押入などに塵芥の堆積するものであるから、月に一度若くは二度の大掃除をすることが必要である。夫れが爲めに流行病の微菌も發生せず、済むのである。若しも毎日又は月に一度の掃除もせずに放て置たならば、何であらうか。必ず悪い微菌が発生して遂には其家を焼かなければならぬやうに成るであらう。

心も丁度其通りて、毎朝々々掃除することが大切である。況んや月に一度の大掃除をすることに最も念を入れなければならぬ。

先達ての大逆事件のやうな黒死病以上の危険な病氣が発生するのも、淺間山や華嚴瀑で厭世自殺をするのも、海や鐵道で若い男女の心中をするのも、皆之れ心に流行性の微菌が発生し、傳染した結果である之れを豫防するには前述の心を掃除をすることが最も必要である。諸子が毎朝起ると、どんなことを考へて居らるか、一日働いて居る間にどんな考へを起すか、又夜寝やうとする時にはどう云ふ考へを以て寝るか。朝起きた時から美味物を食ひたい。美しい物が着たいと云ふ考へがあると、仕事に取掛ると立派な奥さんとか、美しい嬢さんが目の前にチラツクやうになる。又暫くすると懐にウンと金を入れた人が入つて来る。さうすると心の内に種々の慾が起つて眞面目に仕事が出来なくなる。此等は只自分の心の内に考へる丈けてあるから構はないやうなもの、夫れが即ち心の塵芥である。毎

日さう云ふ塵芥がたまると半月も放つて置けば大分澤山な塵芥が堆積るやうになるのである。から毎朝々々怠らずこれを掃除するが宜い昔は信仰ある家では毎朝佛前に燈明を挑げて禮拜をするとか又は經文を讀誦したものである是が即ち毎朝心の掃除をするのである昨日の朝から引續いて愆が起つた。悪い企てが出た其たまつた塵芥を朝起ると口を嗽いて神佛の前に出て禮拜をして居ると夫れて悉り打拂はれて仕舞ふのである。夫れから朝食を頂戴して仕事をする。晝頃になると段々見たり聞たりすることから良からぬ心を生ずる様になるそこで又翌朝は神佛に向つて懺悔をする如是く毎日心の掃除をするから大した塵芥も溜らずに大惡心を起さずに済んで行くのである。

然るに今日では朝起きて佛前や神前に禮拜することが廢つて仕舞うた。此習慣の廢る代りに他に良いものを持つて來て夫れに代へると宜いけれどもそれを成さないのて毎朝の心の掃除は全く無くなつた。中國邊へ行

くと二十人三十人の召使を置いて居る大店でも毎朝主人が先達て佛前に出て禮拜をするそれから店の衆が續いて出て同じく禮拜する。そう云ふ家風な家は今でも到る處澤山に見受けるのである毎日の掃除が出来る上にも月に一度なり二度なりの心の大掃除をすることが互に最も必要なたとである。

扱て我々の心にはどんな塵芥が溜るかと云ふに我々の心の塵芥は十二十と限つたものではない。斯く無數にある中で一つ丈けに就てお話すると。御維新以來一般の人々の頭に權利義務と云ふ考へが出來て來た。百姓町人に係らず權利義務の考への無い者は無いやうになつた。尤も此權利とか義務とか云ふ考へは決して悪いと云ふのではない。法律上に於て行はるゝ權利義務は當然あるべき筈の考へである。併し總べてのことに權利義務を設けたとすると宜くない早い話が道德上に此權利義務を提出するのは道德上心の塵芥と云うてもよい。併しこれも道德上のある側て云ふ

話である。一體日本の道徳上最も大切なる事は何んであるかと云ふと即ち忠孝の二つである。總べての道徳は此忠孝の二つから出ると云うて差支はない、これ無くんば日本の道徳でないといつても差支はない。然るに此忠孝と云ふところへ權利義務を提出しては、天子様に忠義も盡されず、親に孝行も出来ない譯になる。而已ならず權利義務の一點張りては主人に對して忠勤の出来るものでもなく、又主人も召使に對して親切の出来るものではない。それでは美しい道徳の行はれるものではない。

今日小学校の子供に親孝行の話を開くと、最初の一度は謹んで聞くけれども、最早中学校の生徒にてもなると、表面は兎も角内心には親のお蔭を知つて居る者は少ない。今日自分で飯の食へるやうに成ると、それは親の恩であるといつて聞かしても決してさうは思はない。中学校以上になると、親が私を教育したのは親の義務である。私が教育して貰ふたのは子たる私の權利だと考へるやうになつた。であるから何の様に結構にして貰うて

も親としての當然の義務、それを受けるのは子としての當然の權利だと考へるから眞の心から孝行と云ふものが出来ない。お師匠さんの御恩と云ふことが無くなつて、今日では學校の先生は我々が月謝を出すから我等が教へを受ける權利者で、先生は月俸を取つて居るから教へるのが義務だと云ふ。又主人と召使との間に於ても誠を以て使へるとか、誠の心から親切が盡されると云ふことが自然なくなつて來たのも、此權義の思想が強くなつた爲めである。此等權利義務は道徳の上から申すと塵芥だと思ふ。

其塵芥を掃うて行かなければ眞の美しい道徳は行はれないのである。夫れを掃ふには親の御恩に難有いと云ふ感が起らねばならぬ。親に對しての權利義務又は天子様に對しての權利義務、主人に對しての權利義務と云ふ考へが一切打掃はれて、初めて茲に親が子を教育するのは當然だと考へる心が無くなりて而して父母の御恩だ親の情だ誠に難有いと云ふ考へが初めて起つて來るのである。權利義務の考へを以て向ふから親の情を難

有いと思へぬのであるが、今試に自分を中心として自分はどうして育ちて来たか考へて見られよ、此に初めて親の難有いこと、天子様の難有いと主人の難有味が分つて来る。自分が十人並に成つたと云ふことは何に依つて出来たのであらうかを能く考へて見なければならぬ、今日多くの人は自分を中心として主觀的に之を考へずして君や親や師匠主人を客觀的に科學研究的に考へるから直に權利義務的の考へが起きて来るのである。今日感化院とか養育院、孤兒院には澤山の子供が居る。彼等の中には不良少年が多い。彼等が十人並にならぬ、不良少年と成つたのは何が原因であるかと云ふことを統計の上から考へて見ると眞に我々は兩親の有難いと云ふことが感じられるのである、其不良少年の多くは皆親の無い所から或は繼父繼母等から出来たやうである。それでは此繼父母とか無慈悲な親達は子供に飯を食はさなかつたかと云ふに、食物も食はして着物も着せたのである、それにも關らず、僻み心が出来たのは何故であるかと云ふには

親の眞實の可愛と云ふ心が無つたからである。親の眞心の底から食せたり着せたりしなかつたから眞の人間に成れなかつた。して見ると僻み心も出来ず、十人並の人間に成ることの出来たのは、親が可愛と云ふ眞心が有つたればこそである。夫れから考へると親の有難味が分る。たとひ粥を啜り汚い着物を着せて育て、貫ても、今日十人並の人間に成つたのは全く親のお慈悲から出来たのである。此く僻み心の無いのは可愛と云ふ眞心から育てられた賜物である。

天子様の有難いと云ふことも自分の斯く成つたことから考へると分る。今日は自分の心に親は何か、天子様は何か、主人は何であるかと科學的に學問上から考へるやうに成つて来て。天子様が我々人民を保護して下さるのは當然だと考へるから學校の先生は生徒を教へる者、主人は奉公人を保護するものと考へるやうに成る。さう云ふ學問上から起つたこととなくして自分を中心にして考へると親の誠が無つたならば人並の者に成るこ

とが出来ない、學校の先生でも其通り自分が今日帳簿の一枚も記ることが出来算術の一つも出来るやうに成つたのは全く學校の先生が親切に教へて呉れたお陰である、主人でも其通りで自分は誰に保護されて居るのであるかと考へて見ると主人が有難いと云ふことが分る。其御恩が有難いと云ふことが分つて来れば親を大切にするやうになり。主人に忠義を盡すやうになる。然るに世の中には親と子、主人と雇人又は朋友間に仲違ひをすると云ふのは餘り權利義務を振廻すからである。如何にも彼のお方の御陰と云ふ考へが無くつては正直な行が出来ないのである。

昔であるとは佛敎を信する者は佛様を信じ神道を信する者は神様を信じて居る。其信念から行ふから神様に對し佛様に對して誰が見て居なくとも行爲を慎しみ仕事を眞面目にすることが出来た。然るに今日の如く、目に見えぬ事は駄目だ又は人の見て居ない處では何をしても宜い、即ち人の見ないことに善いことをするのは椽下の力持と云ふ考へが起る。椽上と

椽下との両面あるやうな人であつてはならない。假令人間が見て居やうが見て居まいが、人間以上の神佛の目と耳に遁れ出ることが出来ないといふ考へにさへなれば、人が見て居やうと居まいとに係らず、何な處でも爲すべき事は無報酬でもすると云ふことに成ると立派な行が出来る。此考へ以前には有つたのであるけれども今日は全く打倒されて仕舞うたので、今日漸く其挽回を思立つても容易に出来ぬのである。此に初て道徳倫理の外に宗教と云ふものゝ必要が生ずるのである。仕事をする人間に宗教的信仰が無くつては眞面目に仕事の出来るものではない。自分のすること、神佛が監視して下ると云ふことが無くつては出来るものではない。年の行ぬ人には宗教を信ずると云ふことが出来なくとも心の掃除には月に一度位は聽いて置くと心が清潔になる。東京でも田舎でも毎朝何をするかと云へば第一に新聞を手にする、其新聞には殺人だの自殺だの強盗だの強姦だのと云ふ良らぬことの多くが目に入る、稍もすると此塵芥が強大な力

となつて其通りの行をすることになる。毎日々々其通りの塵芥が心の内に入らぬから遂には恐ろしい心の病を起すやうになる。夫故に心の掃除を怠らざれば澤山積らずに濟む。かくすれば人間と云ふ者は正直な心を持つて行かねばならぬと云ふ考へが起るこれが互に心の本源を浚いて行ひに間違の無いやうにするに大事なことと思ふのである。

一六 正しき宗教を正しく信ぜよ

先般かの社會主義者の罪状について愈判決が下ることとなつたので、吾人はこれによつて、彼等の行動を知ることが出来たのであるが、實に何ともいひやうのない怖ろしい企を彼等は抱いたものである。これには如何なる理由があるかは知らぬが、その行爲は日本國民として夢にも思ふべからざる大事を敢てしやうとしたので、吾人は實に寒心に堪へない次第である。これまで、新聞上などで、露西亞や、亞米利加あたりで、社會主義者が怖ろしい

企をなし、危害を公衆に加へんとしたことなどは萬更聞かぬてはないが、それは遠く距つた外國然も國體や社會組織の異つた國に起つたこととして、格別驚きもしなかつたが、それが、二千年來君臣の關係が、さながら親子の間のやうな我國に於いて、かういふ企を抱くものを見んとは、實に清淨な我國史の上に、一大汚點を印したものだといはねばならぬ。實に歎はしい次第である。これは、吾人がかく思ふばかりでなく、外人の目にも、かく映じたものと見える。先日、某記者が余に語るのを聞くに、この度の事件は既に、十日も前に米國の紙上に紹介せられ、日本有史以來の大事事件だと論ぜられてあつたといふことである。これとても國民の自由思想が發達した今日であれば、或は止むを得ない次第であるかも知れぬ。けれども、いくら自由思想が發達したからといつても、かくの如く極端になるといふには、如何なるところに原因があるか注意してみなければなるまいと思ふ。

右は大なる事件であるが、その小なるものに至つても、近來特に東京府下

に於いて殆んど毎夜の如く、強盜殺人等の慘劇を演じられないことがない。これも従来なかつた譯ではないが、従来のは或は抵抗したとか或はよくよくの遺恨が重なつた場合とかでなければ、相手を殺すといふ慘酷なことはしなかつたのであるが、近來のは、それとは違つて、抵抗の有無に拘らず、いさなり毒手に斃すといふ次第である。こを見聞しては、吾人は、夜分も枕を高くして寝むことが出来ない。これも或は自由思想を曲解したためてはあるまいか。何はともあれ、これ等には深い原因が必ずひそんで居ることであらうと思ふ。この原因に就いては、論者はいろ／＼論ずることもあらうが、余はその一に、正しい宗教の信仰が國民一般に行き亘つて居ないのが、一の大なる原因をしては居まいかと思ふ。といふは他でもないが、先づ強盜殺人の如き、慘酷なる行爲を敢てするものに就いて思ふに、關西地方の佛敎殊に眞宗の非常に盛なところと、我檀那寺は何宗に屬するやら知らぬといふ、殆んど無宗教に近い關東地方とを比較してみるに、前者の方がどうも

後者よりは穩かであるやうに思はれる。余は先年、越後に行つた時、長岡の監獄で某典獄の語るのを聞いたことがあるが、典獄のいふのは、新潟縣は、他府縣に比較して犯罪行爲が數に於いては多くとも少い方ではないが、その罪質を調べてみるに、重罪者は割合少く、殊に殺人強盜の如きは極めて稀である。といつた。

その後伊豫の松山に行つた時、同じく同地の典獄が余に語るに、愛媛縣と廣島縣との犯罪者の罪質を比較してみるに、僅か一葦帶水の隔であるのに、廣島縣の方は、愛媛縣より驚くばかり重罪者が少い。といつた。更に、山陰道に行つた時、同じ島根縣内でありながら、石見と出雲とに就いて聞くに、前者の方が、後者より重罪者は遙に少い。といふことであつた。右は、越後藝備石見等は、何れも佛敎中ても、別して眞宗の盛な地方であつて、その地自然の影響は、重罪者を多く出さないといふ現象を示したものである。こは思ふに、その地方のものは、悉く佛敎殊に眞宗の篤信者ばかりで充たされてるとい

ふ譯てはなからうが、一般の人々に、少しでも多く佛縁があつて、絶えず阿彌陀佛の廣大無邊の慈悲などが聞かされて居ると、いつしかその御徳に浴して、所謂阿彌陀佛の觸光柔軟の利益を頂くことになるからであらうと思ふ。總べて宗敎といふものは、直接その神佛を深く信じなくとも、生れ落つるや、周圍から信仰のある人々が神佛の慈悲を自から信じながらその人に接するといふので、自分は信じて居ると思はなくとも、その腦底には、既に佛陀大慈の光明が到り届いて下されて居るので、成長の後も、慘酷な行爲をしやうとしても、何うもすることが出来なくなるのであらうと思ふ。これに反して、關東地方の如く無宗敎の地方では、頭に神佛といふ觀念がないので、如何なることをしても、人さへ見て居ねば知れはすまいといふ考へから、自己が現在の歡樂を計り、自己が目前の利慾を遂げんがためには、如何なる手段をも敢て憚りなく執るといふところから、遂に増長して、かく、今日東京府下に、頻々として現れる強盜殺人者等の如きを出すのであらうと思ふ。

また、彼の社會主義者が唱ふる無政府共產の如き思想も、ちよつと考へると無理もないやうである。即ち、一方には終日額に汗して働いても、なほ且つ、生活の資を得るに苦むものがあるのに、他方には、勞せずして金殿玉樓に住み、功なくして美衣美食に飽くといふものがあるのみでは、憤慨に堪へないといふも、尤も、尤もであるが、彼等の望む所は、畢竟するに物質的慾望の満足、たとへ、そが理想の如く四民平等に得られたにしても、それで、不平、不満なく生涯を送れるといふことは決して出来るものでない。聞くところによれば、この度舉げられたその主動者の中には、基督教の系統のものもあるが、また、佛敎僧侶も三人まで混つて居るといふことである。全體彼等は、佛敎の平等差別の理を如何に考へたものであらうか。また、因縁因果のことは、何を心得たものであらうか。要するに彼等は、正しき宗敎の信仰が得られなくて、一途にわが思うたことに偏執したため、かくは極端なる行爲をも敢て企つるに至つたものであらう。それで余は、今日かく怖ろしい極端な

社會主義者を出し、また、かく惡むべき弊惡なる強盜殺人者を出すに至つた、その主なる原因には、勿論自由思想の惡影響もあり、その他、いろ／＼の原因もあることではあらうが、その中の一には、たしかに、正しい宗教の信仰が一般國民に缺亡して居るといふにも大に由ることであらうと思ふ。

一七 親戚間の音問を懈るな

明治維新前に於ては、親戚その他平生最も懇意にして居る朋友は、其土地の祭禮とか、五節句とか、或は父母や祖先の誕生や佛事を執り行ふとか、云ふ時分には、互に招き合ひ招かれ合ふて常に往來したものである。て道が少少遠くても、少くとも年に一度位は必ず往來をして、以つて交情を温めたものであつた。然るに近來に至つては、右様のことが全く無くなつた譯ではないが、以前の如く互に親しく招き合ひ、時に依つては泊り合ふと云ふやうなことがだん／＼廢れて行くやうである。尤も國に居るものは、いくらか

似よつたことも少しはするが、遠く國を離れて、或は東京とか、或は北海道とかに移住して居るものには、互にゆき／＼をすると云ふ譯に行かぬ。従つて自然書翰の往復までが疎遠になつて來ると云ふ風である。尤も之等のことは維新前と今日とは總べての點に於て非常な相違があるから、一口に風習を維新前に復すと云ふことは出來まいが、成べく親戚知己は互に相往復し、書翰のとりやりも頻繁にし、以て相互の事情を悉しく知り合ふ様にする必要があらうと思ふ。

それに就て余は近來切に感じたことがある。と云ふは、先般余が親戚の某が家事の事で遙々余に相談しに來たが、余は國を出てから殆んど三十年、時々歸省もしないではないが、往訪するのが手近い親戚や知己のみで、邊鄙の地に居る親戚や舊知は容易に訪へない。だからその人等は爾後如何に生活して居るか、一年一度の年賀狀位では分らう筈がない。然るにさう云ふ先方から今俄に家事に就いて相談を持ちかけられても、其家の現在の

状態が余には想像がつかぬので、何と答へてよいか分らぬ。尤も来た人は家の變遷等に就ては悉しう語らぬてはないが話ばかりではさう明了に分るものではない。且つ、其人の語ることをしても、一から十まで少しも間違がないとも限らぬ。故に余にはたとひ力を入れて相談の相手にならうと思つてもなる譯に行かないのである。て余は前に云ふ如く親戚や知己は平生交情を温め、相互の事情を能く知つて居らねばならない之をよく知つて居りさへすれば、まさかの時に其に應じて家事の相談もすることが出来る。然るに實際が分らぬと情に於ては捨てるに忍びないが、我家財を捨て、彼が意を満足せしめると云ふことは出来ぬ。加之去るものは日に疎しと云ふ語もあるやうに、書翰も廢し、ゆきしもしなかつたならば、自然その間に情誼も薄くなつて來るに違ひない。故に此邊の所は、お互によく注意しなければならぬことと思ふ。

一八 人に知れんことを求めるな

先年私が一寸廣島地方へ參つたが、その折高等師範で二回程精神講話を致したので北條氏は返禮かた／＼私の處へ尋ねて來られた。實際いろ／＼の話の末彼の小豆島寒霞溪の話が出て、自分も都合次第では歸りに立寄つて見る積りであつたから風景の模様を尋ねた處が氏の答は以外であつた。寒霞溪の風致は左程賞する程のものでもないが、私は一つ善い拾ひ物をしたと申されたその拾ひものと云ふのは、彼島の小學校を參觀した處が萬事能く完備して少しの非難すべき點がない、そこで色々様子を尋ねて見るとその校長は人物と云ひ、學才と云ひ、なか／＼小學校教員として置くには惜しい人物である處が、此人は嘗て教育界の爲めに容れられずして遂に小學校教員として教鞭を取ることとなり、全力を盡して此の片田舎に自己の天職を全うしつゝあるのである。私は痛く之に感心して早速その校長を廣島の方

へ招いて今は或處の某學校で有用な人として用ゐられて居るとのことであつた、如何にも文王が大公望を得て歸つた話と好一對て教育界の美談と申して宜しいことと思ふ。

此の事に附隨して北條氏の話さるゝのに一體人は自分のなした仕事を人に知られたいと思ふ希望が多あるが此の慾望のない人でないと本統の事は出来ないと思ふあなたは諸方を巡回せらるゝから、そうゆゑ人にも随分御出逢てあるよと尋ねられた、そこで自分は鹿兒島の隠士某氏の如きは先づ其の一人であらふと云た、所が右隠士某氏は北條氏の舊友で曾て鎌倉の今川洪川師の許に共に參禪して、今も尙音信を續けて居らるゝさうであるが某氏は自己の功を誇らない偉い人物であると申されて遂に話は某氏の身上に移つた、某氏は日露戰役の時には別働隊として義軍を組織し、馬賊を操縦して頗る有力なる秘密行動をなし、大に我軍の行動を助けた人である、功績は社會には餘り知られてゐないが、其功は拔群であつたさうである。

處が某氏が戰爭中一番困つたのは部下のものが自分の爲した仕事を兎角他人に知らせたがる事であつた、さうである、非常に大切な秘密な任務を帯びて遣つて居たのであるから、秘密が洩れたら大變である、然るに部下のものが動もすると女人や知己などに手紙のささて、今は何處にどうしてゐるなどと洩したがることがある、此自分の爲したことを他人に知らせたいといふ情を制するのが何よりも一番困難であつたと云ふことである、成程之れは吾人の修養上大に味ふべき話である、實に自分が爲した善事を人に知られたいかか賞めてもらひたいとか云ふのは、まだ一駄目である人が知らぬが知るまいが、そんなことには頓着せず、自分が爲すべきことを爲して、知らん顔をしてゐる人ほど尊いものはない、そこで修養を積まなければ本當でない、古人の語に、惡をなして人に知られんことを恐る、惡中猶ほ善路あり、善をなして人に知られんことを急ぐ、善處即ち是れ惡根なり、と云ふことがあるが、人に知られたいと思ふてする善事は、その胸中猶純潔ならざ

るものがある、悪いことをしても人が知りはずまいかと疑懼するものは、尙ほ善根の萌がある、換言すれば良心の力がある、どうも互に修養して、善事をなしても、敢て人に知らるゝを求めない様にしたいものである。

之をなすには如何すべきやと云へば、乃ち信仰の力によるより外はない、吾々凡夫が始めから、色々と力み心を出して、そういふ名譽心を全然なくしようとしても、容易に出来るものではない、宗教の信仰を得て、始めて自然とそれにかなふ様になるのである、何故なれば佛の御照覽の下に自分は只自分のなすべき職分を盡すのであるから、人が見てくれようが見てくれまいが、賞めてくれようが賞めてくれまいが、そんなことは全く關係しなくなる、唯我々は佛の指圖の下に大業をなさして頂くのであるから、薩日向なく佛の誠心を心として進む様になる、こうなつて來ると只佛に對して誠である、と云ふことが世間に向つて、立派な行となつて表はるゝものである、私はいつも、そう思ふのである、人倫とか道德とか云つて、世間では色々と綱目を並

べて居るけれども、畢竟之れは道德の形式である、形式は時勢の進歩變化と共に如何様にも變るのであるが、此形式を作る内容は不變なものでなくてはならぬ、それは乃ち此誠の心である、誠と云ふ心がなかつたならどんな善い行でも本統に賞むるには足らない、今日も東亞の光と云ふ雜誌である人の論文に日本の忠孝と云ふものは、畢竟道德の形式に過ぎない、その内容は乃ち至誠である、と云つた人があつたが、私は至極尤な論議とすらうた、要するに凡ての道德の根底は誠の一事である、而して此誠の大根本は何處にあるかと云へば、乃ち佛の御誠である、此誠を我々が體得して、之れに適ふ様にさへして居れば、それが即ち自然と人の道にも適ふ様になるのである。

一九 油斷するな

右の歸りに、岡山の醫學校と監獄とに立寄つて話をし來ましたが、その節千輪性海氏からいろ／＼監獄の模様などを聞いた、千輪氏はもう殆んど

二十年監獄の教誨に盡力して居らるゝので、囚徒の様子などには餘程通じてゐらるゝ氏は先年來囚徒の犯罪の心的状態を色々と研究せられたが、此頃になつて漸くその結果が分つた、それは囚徒が始め罪を犯さんとする時の感想を段々調べて見ると、十中八までは、これ位のことは分るまいと思つたことが本となつて罪人となつたのであると云はれた、なる程尤もな説である、始めからかゝる大罪をと思つては決して罪を犯せるものでない、尤も一二の例外はあらうが、多數の人に付いていへば、そう悪いことゝ氣が付けば、必らず犯罪しないに違ひない、ところが悪いことが悪いと氣が付かず、この位な事はしても差支へなからうと思つてやつたことが、いつても失策の本となる、一つは又分るまいと思ふのが大なる過ちである、自分のなした一舉手一投足はたとひ些々たることでも、必らずいつかかな人に知らるゝもののである、否よし人は知らないても、見て御座るお方があるそれを分るまいなど思ふて、敢て悪事をなすなどゝはもつての外である、天網恢恢疎にして

漏らさず必らず表はるゝ時があるのである、それをそうとは知らずに、分らないから爲てもよいなどと悪い了見を起すのは、全く天地の道理が分らないからである。
要するに人は油斷と云ふことが宜くないので、此の位なことはと心に許してかゝるのが危険の基となるのである、これは犯罪のみに限つた譯ではない、何事によらず、この位のことはと輕蔑してかゝつたら、必ず失敗を來たすものである、まして道德上のことになると、始めこの位の事はと許して爲した行が基となつて、次には、それ以上の事でも、左程大したことに思ない様になつて知らずゝの中に深いゝ罪を犯す様になる、そこで始めの油斷が大事である、この油斷のない様にする爲めには、是非とも佛の力を借なければならぬ、吾々も互が日常爲して居る行爲は、お互の上に於てこそ、左程罪惡を犯してゐる様な感じは起らないが、實は其一々か誠を缺いてゐる、ましてこの位のことはと心に許す様なことに至つては、非常な罪惡である、世間

て云ふ罪惡は法律に觸れたものに付てのみ云ふけれども、宗教の上から見
た罪惡は、そんな上つらのものではない、法律に觸れて居ようが居まいが、そん
などには關係しない、只佛様の誠にかなつて居るか居ないかと云ふ事が
主となるのである、こうなつて來ると吾々は心に少しのゆるみがあつては
ならぬ、大に修養に修養を重ねて始めて之に到着するのである、また佛が絶
えず照覽して居らるゝといふことに氣が付けば、分りやすいなど云ふ了
見は到底起る筈がないのである。

今一つ千輪氏の話に、囚徒の一々を調べて見ると、慚愧の念が少しもない、
「汝はこうゆう悪いことをしたと責めつけると、必らず彼は私ばかりではな
い、誰れ〜は私よりもつと悪いことをしてゐると答へる、實に彼等の胸
中には一點慚愧の念がない、あゝ私が悪う御座いました、すまんことを致し
ました」と慚愧懺悔の念に乏しいと云はれた、之れも如何にも尤もな話と思
ふ、が此の話は監獄ばかりでない、普通の人間にも随分あることと思ふ、乃ち自

分ばかりではない、誰れ〜もやつてゐると云ふことはよく人の言ひ譯に
聞く言葉である、元來善いとか悪いとか云ふことは人がやつて居る、居ない
て定まるものでない、人が自分より多くの惡をなして居ようが、居まいが、そ
んなことは問ふべきことでない、自分が惡事をしたと氣付いたら、すぐ改め
てよいのである、それを改める心を起さずして、誰れ〜はかうである、人
の非を擧げんとするのは、更に自分の惡を増さしむるものである、之れは偏
へに慚愧の念がないからである、慚とは悪いことをしたとき過まりはづ
心である、愧とは自分より上の人を見て、自分の行ひの及ばないことをはづ
る心である、この二つの心は吾々をして善道に向はしむる善心である、そ
て佛敎では慚愧を二大善根としてゐると同時に、無慚無愧と云ふことを二
大惡根としてゐるのであります。

ところで吾々の心狀を察して見ると、實に無慚無愧の心に満ちてゐる必ず
しも囚徒のみではありませぬ、親鸞聖人てさへ述懐和讃の中に「无慚无愧ノ

コノ身ニテ、マコトノコ、ロハナケレドモ彌陀ノ廻向ノ御名ナレバ、功德ハ
十方ニミチタマフ」と述べられてある、されば我等は只佛の御慈悲を仰ぎ佛
の冥見を畏れ慎みて人間の渡る道を誤らぬ様にせねばならぬ。

二〇 感應道交

感應道交といふ事は確かにあり得る事て古今に之が實例は澤山ありま
す、昔孔子の弟子曾參が山へ行て仕事をして居た所が俄に齒が痛み出して
堪えられない程であつたが、ふと家に残してある母親の事を思ふて、何か變
つた事でも起りはせんかと案じ乍ら家に戻りて見ると、不思議にも其母親
が齒が痛んで苦んで居つたといふことが、昔しの書物に書いてある。これは息
子の心と母親の心とが感應したので、斯る心と心とが相感應するといふ事
は決して珍らしくない、従前の心理學者は斯る事實は偶然の出來事だと説
明したけれども、近頃は段々心理學も發達して、此感應作用の確かに有り得

るといふことも種々の實驗に依りて研究するようになった事である。
これは自分の知人から聞いた話であるが、彦根の去る家に一人の息子が
ありて、其息子が悪友に誘はれて、放蕩に身を持ち崩し遂に昔氣質の父親の
怒りに觸れて勘當せられたさうである、そこで其息子は段々流浪して越前
の福井まで遣つて來たが、其頃は前に前非を悔ひて改心して遂に指物屋の
弟子となつた追ひく、技術も上達したから、其後母親へは内々て年に二三
度位は音信して、母親からもどうかして父の勘氣を許されて、早く戻るよう
にして遣りたいと始終云つて來たさうである、斯て國を出てから六年程經
つたが、或夏其の男が予の知人の家に雇れて來たが、其時こういふ事があつ
た、或夜二三の朋輩と蚊帳の中に寢て居つた所が母親が青褪めた顔をして
其男の側へ來た夢を見たので、何となく母親の事が氣にかゝり、心持も悪か
つたから側へ來た夢を見たので、何となく母親の事が氣にかゝり、心持も悪か
も其後三四日經つと彦根の實家から母親が俄かの病氣で亡くなつた事や

ら又死する際まで其息子の事を言ふて居つた事などを通知して来たが、其死んだ時刻が恰度夢を見た時と同時にあつたといふ事である、これは十四五年前にあつた事實話で親しく予の知人から聞いた話である、此等も母と息子との心が感應した例である。

かういふ例は日露戦争中にも随分あつたさうで、詰り夫の戦死した夢を見たり或は親が子の討死した夢を見て、而かも其後軍隊から通知して来たのを見ると、其時刻が同日同時であつたなどいふ話が、當時の新聞などにも時々載て居た又或雑誌には愛犬を失ふた人の實驗談や又愛馬と其持主との感應した話などが載つてあつたがして見れば人と人との間ばかりでなく、人間と畜類との間にも此感應の行はれることは事實であるらしい、近頃流行する種々の催眠術なども其原理を究めて見たならば一種の感應作用であるかも知れぬ、此間の警世新報にも上野動物園の獅子や駱駝の話が出て居つたようだが、あの通りで獅子や虎の如き猛獸でも愛情を以て之に

向へば自然に懐つき、感^{かん}を以て之に對すれば猛獸も自ら屈伏するといふこととである即ち此等も人と獸物との心が相感應するからであらう。

斯様な次第で心が同じければ人間と獸類とても感應することが出来る。況して人と人との心が感應することは敢て怪むに足らぬ譯である、然らば何事でも凡て感應することが出来るかと云ふに、そうは行かぬ何故かと云ふと、一方て親が子の事を思ふても、子が親の事を何とも思はないては感應は出来難い、雙方の心が一致して真心を以て互に相思はなければ、決して感應の電流は通するものではない、感應には此真心即ち誠心正意を以て相念ふといふことが肝要な點である、先きの話の場合でも母親は慈愛の心を以て、日夜息子の事を思ひ、息子も先非後悔して常に母親を慕ふて居つた其雙方の真心が死際に至りて山河を隔て、離れて居る息子に感應したのである、特に死際に此感應が多く起るといふのは、人の死せんとする時には最も一圖に思ひつめるもので見たい遭ひたいといふ念が真心より起るものである

るから、從て感應といふ事も起り易いのであらふ。
 佛敎では此真心の事を至誠心とも至心とも一心とも申して、我等衆生が
 佛に救はるゝといふのも佛の慈悲心と衆生の佛を敬慕する至誠心とが互
 に感通し融合するのを云ふので之を佛と衆生とが感應道交すると申すの
 である。衆生が佛を憶念すれば佛も亦衆生を憶念するといふ具合で佛心と
 凡心とが一體となるのである。若し我等の心に至誠がなく、疑念を挿み妄想
 が入りては此佛と感應する事は到底出来ぬ。我等の心中一點の邪念なく、至
 心信樂己れを忘れて佛を慕ひ佛を憶へば所謂至誠の心が自ら佛に徹底し
 て、歡喜の心も自ら起り、安堵の思ひに住することが出来るのである。恰度水
 と月のようなもので、水が静かに澄んでさへ居れば、天上の月は何時でも地
 上の水に宿るけれども、水が濁つたり波風が騒いだりしては月影が移らぬ。
 我等は何時でも佛と感通し融合することが出来る筈であるけれども、お互
 我々は凡夫の妄情に妨げられ、不完全な知識や自惚心で得意となり、飾り心

や偽り心で自分から障を作つて隔て、居るから、真如の月を眺め佛の慈悲
 を體得することが出来ぬのである。そこで我等が信仰に入るには、凡て自己
 の淺薄な念慮を去りて、即ち一心一向至誠の心を以て佛に對せねばならぬ。
 蓮如上人は之を「雜行雜修自力の心を振り捨て、一心に彌陀をたのめ」と薦
 められてある。生じいに自己の學問知識を振り廻はさず、一切自己の能力を
 打ちすて、唯真心を以て佛に信頼せよといふのである。されば知らず識ら
 ず佛と感應道交が出来、大安心大安堵の境に遊ぶことを得、又從て自ら佛の
 力が加はりて處世の奮闘にも堪ることが出来るのである。信仰に限らず凡
 て至誠心といふものは必要で、此真心がなければ人を感動せしむることは
 出来ぬ。何かの破目て事業に失敗した場合でも、隔て心がありたり、隠し立て
 をして他に相談しても、誰れも本氣で世話はして呉れぬ。社交の上でも其通
 りて人が自分を疎外しても、自分さへ常に守るべき本分を行ふてさへ行け
 ば、いつかは其至誠が他に感應する。嫁と舅姑の間の不和といふのも、多くは

此隔て心語を換へて云へば互に至誠の心が缺けて居るからである、されば我等は何事に就けても此至誠といふことを忘れてはならぬ。

二二 佛教の二方面

近來は世間の若い人達でも眞面目な人は佛教を聞きたい、信仰を得たいといふものが段々あるらしいが而かも世人の多くは尙人生に不必要の如く誤解し、佛教を唯死後の準備の様に思ひ、餘命のない老人には兎も角血氣盛りの若い者は左程聞くことを要しない、又何事も辨へざる世の愚夫愚婦には多少信仰の必要も認めるが相當の教育を受け知識の素養あるものには地獄や極樂の沙汰などは一向感心せぬといふ風がある、然るに佛教は決してそんな譯のものではない、此等は佛教の皮相を見て其の眞意義を領解しない所謂門外漢の誤想といふものである。

毎々申す如く佛教は一々釋尊の實驗せられた事實に基いて起つたもの

て決して荒誕無稽の説でもなければ、人生に縁遠い教でもない、一口に申せば佛教は人生問題が根本となりて起り、人生問題に最後の解決を與えたものと申して宜しいのである、人は誰れても能く／＼自分を觀察して見ると必ず自己の弱點を見出して、心中竊かに苦痛不安を感ずるものである、若し何等苦痛不安の念がないなど、云ふものあらば之れは人生といふものを能く知らない徒か、又は自己を偽りて居るものである、それで法然上人でも、親鸞上人でも、其他禪宗日蓮宗等八家九宗の祖師達は、皆何れも自己の弱點を自覺し考ふれば考へる程不安の念遣る方なく、何とかして人生根本の苦惱を脱却して安心立命の地に到達したいと一生懸命に修行された結果遂に覺ることが出来て、其信仰の味ひを説かれたのが即ち今日の眞宗なり禪宗なり又その他の宗旨である、佛教に色々の教が別れて居るけれども、要するに其目的は何れも人生の一大事を解決して安心立命することにあるのであります、決して道樂半分や老人の閑潰し所の談義ではない、今日事實の

問題である。

扱て此人生の苦痛弱點を脱却して安慰を得るといふに就ては、人々の機類に應じて各異なれども先づ大別して自力敎と他力敎との二つに別れる。自力敎は哲學的解決を與ふるもので、他力敎は純宗教的に安慰を與ふるものである。即ち理屈の人は哲學的方面に向はないと承知が出来ない。何故に人間は生れたのであるか人間とは何者であるか、何故に苦惱を生ずるかなど哲學的に解決せんと試みるのが自力門である。簡短にその大要を申せば即ち相對と絶對との關係で、相對とは吾人の如き五尺か六尺の身體を以て五十年か百年存在して居る有限のものゝこと、絶對とは宇宙の本體即ち無量無邊の實在のことである。其相對的の丁度水の泡の様な吾人と、無限絶對の本體との關係が自心の上に事實になりたのである。禪宗には此處を「宇宙一枚」と云ふて居る。丁度水と波との關係の如きもので、風の縁があると男波女波と相對的の差別が生じて來るが、そのまゝが絶對平等の水である。

水を離れて波なく、波を離れて水がない様に、互も五尺の體で五十年百年の間存在して居ると思ふのが抑も間違て、吾人の五尺の體軀其儘が即ち宇宙の本體である無限絶對其者である。して見ると苦痛など云ふて騒いで居るものも、實は絶對の一波瀾であつて、決してそれに執着したり迷ふたりすべきものではない。

尤も之は絶對と相對との理論的關係であつて、斯様々々と判つただけで學問になつてしまつて、唯道理理屈のみでは苦痛も煩悶も除かれるものではない。譯は分つても之が精神上事實にならないと決して自分を救ふ力はない。丁度學校の講義を聞いても、唯理屈が判つただけでは何の役にも立たないが、その理屈が實際に應用活用せられて始めて學問の價値が現はれる。如く佛敎のことも何事に限らず精神上に事實となつて現はれて來なくては駄目である。即ち宇宙一枚と觀じたなら、その事が直ちに精神上に現はれねばならぬ。それがないと苦惱煩悶は何時まで經つても打消されない。然る

に精神上の事實となると、心は常に泰然自若として、毫も動搖せられず、人間萬事總て之れ本體の作用なり、宇宙の波瀾なりと、合點が出来様になるのである。

又或人は理屈は好まぬ、理屈は要するに理屈で何の役にも立たない、他力てなければならぬ、宗教的てならぬばならぬといふ人もあるが、然し乍ら佛敎の中の宗教的の本質は、矢張り哲學的の本質と同じこと、哲學的研究の結果が實行的方面に現はれてゐるのが、宗教的即ち他力門であつて、前にも申した通りに、荒誕無稽なものでも、何でもない、條理整然たる理論が宗教的方面から進むと、彌陀如來となるのである、人生の事實たる苦痛とか煩悶とかいふものに就て解決を與へたもので、元來が哲學的であつて、それが信仰となる、と宗教的の溫りが生じて來るのである、極樂も阿彌陀如來も實に大哲學であつて、自力と云ひ他力と云ひ、哲學と説き、宗教と談ずるも、皆人生を濟度する爲に種々に別れて居るのであつて、本質は同じものである、ツマリ

入り道が東西南北左右上下と異つて居るのみで、到着は同一である、故に佛敎は大學者も大愚者も共に、樂むことを得、安慰を受けることが出来るのである。

宗教的の方面で云ふならば、此五尺の身が宇宙である本體である、聞いても學問として又理屈としては判るけれども、自身には事實感ぜられない、何と思ふて見ても自分には力のないものである、不完全な奴である、自分乍ら自分を顧みて愛想のつさるのが互である、斯る不完全極まる吾人は如何にしても自分苦境を脱することは出来ない、實に情けないものである、と思ふて居る處に「爾は無限の光明に包まれてゐることを知らぬか」との囁きに接して見ると、ハ、なんとして今迄は愚であつたらうと、過去を懺悔して未來の光明に向ふことが出來て、爰に信仰の上より大安慰を得、大愉快に感ぜられるのである、そうなつて精神上に光明を認むると、實行の方面は自ら倫理に契つて行く様になるのであつて、宗教の信仰の上には、道德的行爲

が自ら現はれて來ねばならぬものである。要するに佛教は人生の事實問題の解決であるから、自力哲學の門より進んでも他力門から進んでも苦惱を去つて安慰を得るには相違ないが、理屈に傾くと兎角實行を疎略にする憂があつて、眞の宗教の難有みは味はれ難いものであるから、其教を精神上に事實にするといふことを忘れたいものである。それで諸君が佛教を聞かうと思ふなら、一應佛教の哲學的方面の道理を知るのも宜しいが、つまりは他力絶對の信仰に安住しないと、慰安満足は容易に得られない、實行の上にも之が一番力があることと思ふ。

二二 宗教と倫理道德との關係

近來世間では、宗教と倫理道德との關係或は宗教と社會的事業との關係に就いて色々に説を立てるけれども、その説は明白なやうにみえるが、實はさうでもないやうである。早くいふと、學問的に宗教と倫理道德の關係を

説く時と、實際的に宗教と倫理道德、或は社會事業の關係を説く時と矛盾して居るやうにみえる。學問的に宗教と倫理道德の區別を説くといふ側では、多くの人が宗教は相對を脱して絶對に入り、倫理道德は相對と相對との關係であるといふ。然るところ、實際の側で宗教に向つて要求するは何といふことかといふに、宗教家は世間に向つて人を道德的に導き、且つ慈善事業その他あらゆる社會的に貢献するところがなければならぬ。かやうなことが甚だ矛盾したことのやうである。即ち宗教と倫理道德及び社會事業との區別が明白にならないやうに思はれる。宗教が相對と絶對との關係であるならば、宗教は人に信仰を勧めればよい、倫理道德及び社會事業は教育家或は道德家のなすべき仕事で、宗教家の手を出すべきものでない。その領分内でないものを要求するのは抑も間違つたことであるまい乎。これは實に世人のみではなくて、宗教家の内に於ても、各いふ所が異つて居て甚だ明白でない。即ち宗教家の側では、一方に於て宗教は信仰である。

これを勧めるは宗教家の本務で、倫理道德及びその他の社会事業は宗教家のあながち本務としてその方にのみ力を盡すといふは間違つたことといふものがありまた他の一方では宗教といふものは社会及び國家を裨益しないものならば到底これを弘通することは出来ないものであるから、宗教家は努めて人を倫理道德的に導き、慈善事業、その他あらゆる社会事業に奮闘しなければならん譯のもので、一も信心二も信心といつてはいけない。要するに前述の通り、宗教と倫理道德及びあらゆる社会事業の事が頗る曖昧。換言すれば、眞諦と俗諦との關係がさつぱりと領解されて居ないやうに思へる。

今此ことに就いて考へるに、一體凡ての物には體と用とがある。宗教もさうである。これに依つて宗教は相對と絶對との關係即ち相對を没して絶對に入るとは、これ宗教の體をいふ。その體が更に世間に於いて顯れる。即ち相對を没して絶對に入つた後、絶對より更に對に動き出すのが倫理

道德となつて顯れ、衆生濟度とか社会救済とかになるのである。これ宗教の用である。宗教の體即ち相對を没して絶對に入るといふのが彼信仰或は信心である。その信仰信心といふものの中には、倫理道德の意味は決して持つて居ない。即ち倫理道德を超越したものであるから、その中に相對的の善惡や福德罪惡があらう譯はない。若も信仰信心の中に倫理道德的の意味を含んで、自身の罪惡があるから佛の救済に預かれぬとか、自身に福德があるから救済に預かれるとかといふ意味合を帯ひて居たならば、既に相對に落ちて居る信仰で、眞實の安慰を得ることは到底出来ない。

併しながら世にいふ宗教には斯の如き倫理的を帯びたものを勧めるものは随分多い。それ等は宗教としてこれをみる時は、未だ第一義に到達して居ないもので、それ等宗教の信者に絶對的心の底から大安慰を得たものはない。實際吾々は經驗した終局の大安慰を得るのは、絶對的信仰で自身の福德も罪惡も打ち忘れ、佛の大慈悲に投入したものでなくては出来ない。

のてない。然らば右にいふ信仰を得た以上は、倫理道德を履む必要なく、社會に向つて救済をなさなくともよいか、換言すれば、信仰を得た上は恣に罪惡を行つても少しも差支はないかといふに決して然らず、信仰の上で、自身の善惡を氣にせず、自身の福徳に目をかけぬと云ふは佛の大悲所謂絕對に向つた側である。相對の方の側に向つても善惡罪福を顧みてはならないといふてはない。若し相對界に對する時は善惡罪福は飽くまでこれを顧み常に惡を捨て、善に就くやうに努めなければならぬ。相對界の倫理道德を實行するのは、絕對界の佛の大悲に投入した、信仰が佛の大悲から更に翻つて相對界に動く妙用である。

之を例へれば、乳兒が母親に向つた時の状態が信仰で、母親の懷からふり返つて兄弟朋友に向つての戲が倫理道德及びあらゆる社會の救済事業である。母親の懷に抱かれて居ればこそ、兄弟朋友に向つた時腕白や横着はせないのである。即ち乳兒が兄弟朋友に對して仲よく遊ぶのは、母親の慈悲

に融ぜられた妙用である。上述の如く、宗敎には體と用とがあつて、信仰はそのものの體、倫理道德及びあらゆる社會事業の實行はその妙用である。この體と用とをよく心得て、兩方とも偏廢せぬやうにして行かねばならぬ。故に宗敎家は一方に信仰を勸めて佛の大悲に到達せしめ、以て大安慰を得しめると同時に、一方に於ては人を倫理道德に導き、且つあらゆる社會救済の事業にも盡力せねばならぬ。換言すれば、眞俗二諦互に相資け相依つて行くやうにするのが肝要なことである。

二二三 宗敎と倫理と哲學

宗敎の信仰と云ふことが、近頃よほど盛になつて來たやうである、それが東京ばかりでなく、本年も地方を巡つて見れば、到るところ此の種の聲を耳にしたことであつて、一面の意味よりすれば、宗敎の爲め、社會の爲め、喜ぶべき現象であると謂つて可からう、但所謂宗敎的信仰なるもの、中には太た覺

束ないものがあるやうに見える。即ち或る一部の儕は、宗教的信仰なるものを誤解して居るやうである。其の儕の考によれば、宗教的信仰は、凡ての方面の藝術事業に於ける知識能力の源泉である。苟も宗教の信仰を有すれば、何れの方面の事柄にも都合よく間に合ふものであつて、道徳の實行にもあれ、夫れ／＼の職務を爲すにもあれ、宗教的信仰の力によりて優に出来るものであると云つて居る。眞の宗教的信仰を得たならば、或はさう云ふやうになれないとも限るまいが、元來宗教の信仰なるもの、根本の意義は、日常諸般の事を無碍自在にすることを得んが爲めとか、日々の業務を満足に愉快に勤めることが出来るやうにとか、或は、一家庭に風波なく、いつも春風駘蕩和氣霽々の裡に家族樂しく日送ることが出来る爲めとか、云ふやうな目的にのみ止ると云ふ、そんな淺薄なものではない。宗教的信仰が一にこれらの爲めであると思ふは、淺はかな考へ違ひである。實に宗教の信仰と云ふものは、唯現在の苦痛を休めると云ふだけに止らず、其根本義としては、互の心

に一つの落ち付きと云ふものを得せしめなければならぬ。言を換へて謂へば、人間とは全體何であるか、其始何處から來つて、其終り何處に去るものがあるか、の問題を考へて、些の不安を感ずることなき處に安住することを得しむるものが眞の宗教的信仰であらねばならぬ。早く言へば、宗教の信仰は、現實の上にて凡ての事柄を爲すに、何れにも間に合ふものとは、直に謂へないものである。漸々修養してさう云ふことも出来るに至ることなしとせずと雖も、宗教の信仰其ものに直に其力ありとは、謂はれない。宗教的信仰の根本性質として、そんな力あるべき筈のものでないのである。倫理道徳とか、其他一般渡生の事柄とか云ふものは、それ／＼自身の修養若くは經驗によりて出来る所のもので、自己自身の力によるもの、之れを以て宗教的信仰より生ずる力だと直に思ひ做すは、見當違ひである。宗教的信仰は、人生の根本に於いて、自身の落ち付き、即ち自身終局の處に於いて、光明を得しむるものでなくてはならぬことを、繰り返し言ふのである。

今日倫理と宗教とを同じものゝやうに考へる者少くない實際に於いて同一になつて居る點があるから斯う云ふ考も生ずるのであるが要するに上に謂ふ所の宗教の根本義を明かにせぬ爲めである根本に於いて此兩者は全く其の出立點を異にして居るものなることを注意せねばならぬ宗教と倫理との關係に就いては諸學者間に随分論究されて居る大問題であるが至竟斯う云ふことが謂はれやう、

倫理は相對と相對との關係に成り立つもの

宗教は相對と絶對との關係に成り立つもの

更に之れを表示して見れば次の如くなる、



哲學もよく宗教と混同され易いものであるが此は宇宙の眞理を討究する

學問で現象のことは斯う本體は斯うと明かに理論さへ立てばよいのである哲學が研究した現象界の眞理を取つて愈之れを身に實行する所の原理原則として組み立てるのが即ち倫理と云ふものになるのである而して哲學が本體界のことに就いて研究したる結果發見した所の原理を取つて之れを人間と交渉せしめると云ふのが即ち宗教である倫理は現象界の相互關係宗教は本體界と現象界との交渉と云ふことが之れて明になつて兩者のよつて立つ所根本的に相異なる點が知れるのである。

君臣義あるべく父子親あるべく夫婦相和すべく兄弟に友なるべく朋友相信ずべしなどは倫理に於いて規定する所人間相互の關係であつて人生最も必要なものであるが人間相互のことは之れに依つて定めなければならぬとして其の相互の人間其ものは全體何であるか人間の精神人間の肉體は何か相互の來る所歸する所果して如何の問題は吾人に解らなくてもよいものであらうか相互に自分々々の事だ切實に之れを考へたなら遠山

の火事を望見するやうなわけにはゆくまい、されば禪宗では自己を明めよと、やかましく謂ふ、尤もなことだと思ふ、此は一大事であつて、解らんから捨て置く、と云ふわけにはどうしてもゆかぬ、考へれば考へるほど何か落ち付きを得なければ安心が出来ぬ、此の落ち付きが出来なければ、財産も爵位も何の頼みにもならぬ、こゝに於いて人生は倫理のみでは満足が出来なく、なつて来る、即ち此の落ち付きを得ることに向つて一點の光明を與へる所の宗敎を、必然に要求せざるを得ないのである、此の一大事を差し控へ居ながら此に氣が付かぬ者は所謂醉生夢死の漢である、嘗に優游放逸爲すこと無しして一世を送るのみが醉生夢死ではないのだ、實に宗敎は此點を充足するが爲に即自己なるものを明めて安心を得んが爲に、本體に向つて何らかの交渉を覓むるのである、而して佛敎は單に宗敎として立つもののみならず、一面哲學であるが如く、一面亦倫理であるが如く、何れとも片付けてしまふわけにゆかぬやうだ、即ち佛敎は、之等の諸方面を凡て含て居て、高遠幽邃な

哲學を説くが、而も説き放しては置かぬ、必ず其研究した所の眞理を以て自己の根本の處に交渉せしめ、人生終局の處に何等かの光明を認めて安心しなければ止まぬのである、而して本體の處に光明を認めて安心すればそれによいかと云ふと、佛敎は更に現象界に向つても倫理の道に合ふやうにする、故にその倫理も世間の倫理とは其の出立點が違ふ、孔子の敎の如きは所謂倫理で、現象界の相互關係を規定する者である、併し現象元と本體を離れて別に存するものでないから、現象界の規定たる倫理に依つて充分修養して、其の極に達したならば所謂聖人と謂ふに至つて天地と其徳を一にする、即ち本體と合一するに至るが併し之れは甚だ迂遠なやりかたで、而も事實に於いて聖人はあるか、賢人にも中々なれない、殆ど理想として之れを豫望するに過ぎないのである、之れと異り、佛敎に含める所の倫理は、宗敎的倫理とも謂ふべきもので、同じく現象界相互關係を規定するものであるが、其根本の出立點が世の倫理と全く違ふ、倫理では現象より本體に進み、佛敎で

は先づ本體を明め、而して現象に應ずる、其徑路が正に反對である、前者が迂遠であるならば、後者も同様ではないかと言ふものもあるかも知れぬが、其は考への足りない者の言だ、何でも枝末を捉つて、根本を動かすと云ふことよりも、先づ其根本を突いて、枝末に及ぼすと云ふことが、捷徑である、さればこそ、儒家に於いても、後代に朱子、陽明等に至れば、此に悟る所あつて、先づ心體を究めると云ふことを、八釜敷く云ふやうになり、即ち喜怒哀樂の未だ發せざる所に向つて、修養すると云ふに至つたてはないか。

倫理と宗教との異同は、上來説く所によつて、略ぼ明かになつたらう、而して本體より出づる所の宗教は、其立場よりして、絶對的のものである、即ち是非善惡を超越して居るものである、故に信仰と云ふ上には、少くも倫理的の意味を含んで居る間は、決して眞の宗教的信仰とは謂はれない、自身の行ひ振りを考へて見て、それで助けられるとか、救はれるとか言ふ間は、眞に助けられるものでない、やれ正義よ、それ公道よと擔ぎ廻はつて居る間は、所謂

自繩自縛で、戦々兢兢として居て、何に就いても心から落ち付きを得て、其事を樂むと云ふことは出來ない、自身の善惡を顧みず、此まゝ、佛陀の絶對なる慈悲に救はれることによりてのみ、大安心を得て、愉快に樂しく日々の活動を爲すことが出來るのである、此の落ち付きを得て、大安心を得ることが眞の宗教的信仰であつて、ほんの一時的の煩悶を除く爲めの頓服劑として、宗教を視てはならぬのである。

宗教的信仰なるもの、根本意義は之れで解つたが、扱て其の信仰は如何にして得られるものかと云ふに、道元禪師が坐禪は上智下愚を論ぜず、利鈍者を選ぶこと勿れと、示された如く、如何なる人にも此信仰と云ふものは得られるものである、誰にも得られるが、其用心がおろそかでは、利人賢者にも太だ難いことである、人が坐禪する、若くは念佛をやるから、自分も一寸眞似して見やうかな、などのやりかたでは、決して得られない、宗教的信仰は更に深い所に、更に固い根底を有するものでなくてはならぬ、彼の蘇東坡はあれ

程有名な居士であるが、其初は單の儒者であつて、佛敎には何の關係もないものであつたのだそれが佛印和尚に一本突込まれてから、遂に反省する所があつたのである。佛印和尚は如何に突込んだかと云ふに、

人生一世間。如白駒過隙。三十年功名富貴。轉瞬成空。何不二筆勾斷。子瞻胸中有萬卷書。下筆無一點塵。至此地位。不知性命所在。

一生聰明要做甚麼。

東坡此に於いて考三考所謂自身根本の落ち付きと云ふことに氣がついた、あれ程の學識才能を以て熟考に熟考を重ねたが最後の落ち付きと云ふ點に至つては全くゼロである。悟つた悟つて見れば、遂に不安の念禁じ難きものある、乃て初めて心を潜めて佛敎の修行を試みることになつたのである。此處だ、宗敎的信仰の念が眞に起るのは正に此處だ、此反省あつて則ち飢えたる者の食を求むるが如く、宗敎の信念を渴望するに至るのである。是に於いて各其根機に従つて、或は坐禪する、或は念佛若くは題目を唱へる、何れ

にしても悟るか、信ずるかは非共自身根本の所に於いて決心がなくてはならぬ、坐禪をやりかけて見たが、どうも面白くないとか、念佛もよいが、何だか寺の本堂に入つて坐つて見るといやな氣がするとか、そんなことは到底根本の所に達しられないものでない、嫌でも何と何か一つ決着を付けないければならぬ、宗敎的信仰は自身に差し迫つて居る所の緊要問題であつて、學問技藝などは違ふ、自身に引き受けて痛切に考へて見なければならぬ、愈々痛切に考へて見ると、自身が如何に罪惡多き者であるか、先づ思ひ知られる、罪惡と云ふも表面人前に露はれたるものゝみてない、自分は曾て何ら世に惡評を受けず、未だ曾つて法律上の制裁も受けたことがない、又内心顧みて俯仰天地に恥づる所がないなど云ふ間は未だ眞面目に自己を考へたものでない、充分穿鑿して見るときは、誰ても罪惡のないものはないのである、世間で所謂罪惡は、極めて浮淺なもの、ほんの渡世上人の耳目に觸れるものゝみの話だが、人生最終の落ち付きと云ふ所に向つて一點の光明を

覓めんとするに當つて、左様に表面の考察だけでは到底安心が出来ない。是に於いて猛省一番自ら自らを知つて全然佛の慈悲に投入して救ひ取られなければならぬ。此の根底に大なる安心を有すると否とによりて、日常の生活状態より凡ての社會的行動の上に非常な相違を來すのである。此根底の落ち付きを得るとは言ひ換へれば心の奥底に一つ確乎不動の信念を有することだ。所謂眞實の自覺を有することだ。苟も此自覺を有して社會に立つときは利害得失の爲めに志を枉げたり、毀譽褒貶の爲めに意を左右するなどのことはない筈である。所謂威武も屈する能はず、富貴も淫する能はずと云ふ所に自らなるので、倫理道德期せずして實踐せられるのである。それが而も何の窮窟なしに悠々として自ら實踐せられるのである。素人の考で一寸見ると、宗教の信仰なんかつまらぬものだ。非現實的て廻り遠い、現在の人生に直接せるものではない、つまり宗教は人生にどうてもないものである、と思はれもしようが、畢竟其は未だ考が足りない、極めて皮相の見と謂

はねばならぬ、全體何でもないやうなことが、實に缺く可らざる根本となるもので、直接には全く無用の如く見ゆる所却て實際には大に必要なるものである。故に宗教の信仰は必ずしも現的に直接なるものでなくてはならぬと云ふことはない。昨是今非當てにならぬ人生の現實的瞬間の事にのみ直接なるを期して居るやうでは確乎として動かざる所の落ち付き——永久の安心と云ふものは望み得られまい。此意味に於いて、宗教は自然未來のことに亘るものでなくてはならぬやうになるであらう。否、宗教の信仰は、然く根底の深きものでなくてはならぬであらう。

要するに、念佛に依るにせよ、禪によるにせよ、兎に角、自己の性命に就いて悟るなり、信ずるなり、何れか是非根本的の決着を付けなければならぬ。何人も人間として世に處し、一生を通じて意味ある人生、幸福なる人生を送らんとするには、必ず此の決着の處に到達しなければならぬものである。

二四 求道の動機

昔筑前博多に仙崖といふ偉い和尚があつた。此和尚初め美濃の大垣公に仕へて居たが、自分の意見が用ひられぬ所から辭して諸方を流浪し遂に博多の聖福寺に掛錫して多くの雲水を化導して居た。寺は博多の町中にあつて遊廓に近かつた爲め動もすると雲水等は夜ひそかに塀を越して遊びに行つた。和尚は之を知り或夜雲水等が例の如く出て行つた後、雲水が兼て塀を越す時踏臺にして居た石を取り除け、自分が石に代つて其所へうづくまつて居た。其れとは知らぬ雲水等は遊廓から歸り、塀を越すに和尚の頭を踏臺にした。初めの二三人はそれと氣付かないで通り過ぎたが、四五人目になつて踏臺が和尚であつたと分り、一同其所へ平身低頭して不法を謝した。依つて和尚は徐ろに雲水等に向ひ、血氣旺んな汝等が今遊びたがるを無理とは云はんが、能く考へて見ねばなるまい。受け難き人身を

受け遇ひがたき佛法に遇ひ、而も出家までしたのは唯々道を悟らんが爲てはないか。然るに汝等は生死事大、無常迅速なるを忘れて放逸無慚な振舞をして居るが斯くては果して何れの時に道が悟れると思ふか。と云つて懇々訓誡を垂れた。雲水等今此機に臨みて此深切な訓誡を聞かされては、いかで感動せず居られやう。爾後深く和尚の訓誡を肺腑に銘じ、極めて眞摯に坐禪修行をするやうになつたと云ふ話である。凡て人は平生ぼんやりして居る時は、いくら聞かされたり誠められたりしても一向心に泌ひものではないが、何かの機會に遇つた時、深く心を沈めて聽いたならば、其が痛く心に泌み込むものである。今夜催された法筵は、一年一度の報恩講であるから、此機會をはずさず平生の不法懈怠を省み、眞面目に懺悔して、自己が今得難き人身を得、遇ひ難き佛法に遇へることを深く自覺し、如何にしたなら正しき法門に入ることが出来るかと云ふことを眞劍になつて考へなければならぬ。

全體佛法と云ふものは、一寸這入つたからとて初からさう難有いと云ふ念の起るものではない、先づ第一に這入るにしても、吾が行く先きは何うなるものかと云ふことを考へねばならぬ。其を考へずして佛法の門に這入らうとしても、決して這入れるものではない。從來の求道者は後生と云ふことに氣を懸け、死後は何うなるか未來は如何になり行くかと云ふことを考へ、自分の方では到底助かる見込がないと斷念されて佛願の手強きことを知り、之に依れば吾が往生は間違ないと信ぜられて始めて本と云ふの他力信仰に這入つたものである。此信仰が一度頭の中に這入れば其事に於て大安堵を得、平生さ程歡喜の念が起らなくても、遂に眞の信仰に這入ることが出來たのである。然るに近來の求道者は其の様なことは考へずして、唯實感々々と云つて、一時何かの原因に依つて起つた煩悶を抑へんために宗教の門を叩き、其に依つて安堵の思ひがすれば、はや既に眞の信仰に這入れたつもりで居る。併し此のやうな單純の實感と云ふものは、決して深い根

據のあるものでないから、一度其情が他に轉ずると信仰は何所にか行つてしまふものである。こんな信仰は眞の信仰でないから病的たるを免れない。眞の信仰と云ふは、今度の一大事即ち後生未來の問題から解決してかかるのであるから、或はさう無暗に涙が出る程嬉しく感ぜられないかも知れんが、之が種々の縁に觸れて本と云ふの信仰となるのである。即ち確りした理性的のものが其根底となり、其れに感情的のものが加はつて漸く起つて來るものである。

吾々は未だ實驗しないから證明すると云ふことは出來ないが佛法で説く所の來世の存在説は、深き根據のあることであらうと思ふ。彼の佛法の所謂輪廻轉生なるものは、野蠻時代にある思想のそれとは似て居るやうであるが大なる徑庭がある。全體印度では釋尊以前からして種々の哲學や宗教があり、殊にそれが徒らに吐いた理屈ではなくして一々種々の修行をして感得したものである。彼の宿命通の如き、八萬劫の昔を掌文を見る如

く知るの唯理届て云つたのではない。實際樹下石上に修行して實感した者である。釋尊は斯う云ふ修行者の居る時代に出世し、自分も親しく實行せられた上て説かれたのであるから輪廻轉生の事も通力に依つて御實験なされたことを説かれたのである。然るに今日の學者は自ら實驗する所がなくして無暗に之を否定せんとして居るのである。數日前の新聞に、空氣ばかりを呼吸して生活して居るものが近く箱根に居つたとあつたが、是等の如きも通例から云へば決してそんなことが出来る筈はないが、修方一つでは随分出来ないとも限らぬ。三千年の昔種々の方法に依つて修行した印度人等には、何んなことが出来たか分つたものではない。今日實行も出来ない癖に、後生がないの未來は火を消した様なものだなど、云ふ連中は如何に佛説を否定せんとしても、實行せずして云ふのであるから其は覺束ない論と云はねばならぬ。従來の佛敎信者は、出離生死を深く憂ふた。死んだら其儘消えるのでは

なくして新しい生涯が次で出来る。此度は佛願力に依りて永く生死の因を絶ち、未來は美しき報土に往生さして貰はうと思つて信仰を求めた。故に平素身體の健康な時はさまで喜ばしいとも感ぜられなかつたが、親に別れ子に先立たれ等して世の無常なるを親しく目前に見るに至つて人生の眞に敢果ない事を知り、佛願力の眞に手強いことを感じて喜んだのであるから、平生は無信仰者と外見變りはないが事に觸れ物に接して、どきまぎしな、落着いた態度が取れた。本とうの信仰は斯うなくてはならぬ。蓮如上人は信者の取るべき態度を教へられて、他力信心を深く内心に蓄へ、外相には其色を見せないで世間に準じて生活せよ。と仰せられた。之は眞俗二諦の教で、少くも眞宗信者の取るべき態度である。血氣旺んな青年が嬉しいの有り難いものと云つて、氣狂見たやうにメソソ泣くのが能てはない。併し、さう云へばとて放逸に暮せ無慚に過ごせと云ふのではない。平素喜ばれないからいけないと思はずに、今夜の如く報恩講等の法縁に合たを機

會として深く自己の眞價を省み、宗教の如何なるものなるかを思ふて道に
 入れよと云ふのである。今日の如き病的信仰者に限つて、平生は有り難い
 の嬉しいのと云つて居るが、まさかの時に臨むと周章狼狽の醜態を呈する
 ものである。是れ根底のない一時的の所謂實感から得た信仰に住して居
 るからである。

昔明末に雲棲と云ふ僧があつた。或時誤つて沸騰せる湯でやけどをし、
 眞の苦痛は平生想像して居たものと非常に相違すると云ふことが分つた。
 と云つたが、實際さうである。吾々は未だ経験しないので、死後がどうの
 うのと云つて居るが、實際死ねれば平生の想像が非常に相違して居つたこ
 とが知れるであらう。其所で他の事は暫く措き、宗教の事ばかりは自分の
 淺はかな考へて想像したことがはげれると大變なことになるから、深く古
 人が教へて呉れた通りを信じ、只管其れに随順しなければならぬ。之が即
 ち他力である。他力には自分の計らひは混へてはならぬ。自分の計らひ

は小さくて役に立たぬが、他力即ち佛陀の力は之に反して無限に大きいか
 ら、信ずる者は如何なる罪人でも救ふて下さるのである。今話した雲棲は
 禪宗の大徳であるが、或人が雲棲に、念佛の力と坐禪の力とどちらが益が大
 きいか。と問ふた時、其答に、坐禪は自分の力であるが、念佛は佛の力である。
 自分の力は到底佛の力の大きなるには如かない。と云つたと云ふことであ
 る。雲棲にしてさうであるから、死してや吾々は小さな自分の智慧や力は
 抛つて偉大なる佛陀の慈悲に救はれなければならぬ。未だ経験しない死
 後の事は分らぬから、死後の救済はさほど嬉しく感ぜられないかも知れぬ
 が、其れは其れてよろしいから、唯だ之れを信ぜられるやうに努むるのが肝
 要である。斯くて一度信ぜられたならば、親を失ひ子に先だゝるゝ等、眞に
 無常迅速なる人生の眞相を親しく實驗するに連れ、此信仰は愈厚く、且つ深
 くなつて來るものである。て、お互は日常忙がしい課業に従事して居る中
 からも、努めて法縁に接するやうに注意を致し、其度毎に平素の不法懈怠を

懺悔し、穢れたる心中の大掃除をすることにしたならば、眞の信仰も遂に深く味はれるやうになる。其ればかりでなく、是れがいつしか精神の修養となり、世間の倫理道德上から見ても立派な人格となつて現はらるに至るものである。

二五 信仰より顯るゝ活力

余は、先年岐阜の本願寺別院で佛敎講話を致したことがある。その時一人の青年が余に面會を求め、さて云ふには、自分は昨年師範學校を卒業して更に高等師範學校へ入らんとして其手續を致し居る折柄、ふといまはしき肺病に罹り、いろ／＼療養に手を盡したが一向快方に向はず、今は何れの醫者も匙を投ると云ふ始末かうなつて來るとこれまで數年間學んだ學問や教育は何等の用をもなさねば何等の慰ともならず、唯朝夕出て來るはとり止めもない愚痴ばかりである。これでは一丁字も知らない無敎育者と變

りはないと思つて、修養的の話を聞いたり書物を見たりしたので、この節では愚痴は大分なくなつたが、唯一つ何うしても取れない愚痴がある、それは何である乎と云ふに死ぬるのが何うも厭てたまらぬ。自分は何故病氣になつたか、何故死なねばならぬやうになつたかと思ふと胸が張り裂けるやうで、天も恨めしく人も怨めしくなつて來る。と云つて彼は急にそこで泣き伏して仕舞つた。て、余も非常に氣の毒に思ひ、君の病氣は既に膏肓に入つたとすれば、今は急ぎ眞宗の敎を聞き佛陀の慈悲に依つて未來淨土に往生させて頂くことを喜ばして頂くより外に煩悶を退治するの途はあるまい。眞宗の敎はかく／＼佛陀の慈悲はこれ／＼である。と云うて聞かした所、彼は、自分の村の近在にはそれを説く眞宗の寺院がない。と云ふので、余は彼に岐阜別院を紹介して別れた。爾後余が念頭には彼の様子が氣に懸つてならなかつたが、昨年夏、余は再び岐阜別院に招かれて講習に行つた時、小林榮閣君に彼が様子を聞いた所、彼はその後、四里の遠路を態々岐阜

別院に来て、君に眞宗の法話を聞いて居たが、漸々疑が解けるに及んで、日頃の煩悶は跡なく消え、唯胸中歡喜感謝の外はなかつた。が尊いこの法を獨り喜ぶは勿體ないとして、村へ歸つて村民に信仰を勧め居たが、村民が非常に之を歡迎した處から自身も追々元氣づいて一時は回復も出來そうにあつたが、重り行く病勢には勝てなくて、五日程前に目出度く往生の素懷を遂げたと云ふことであつた。

それからまた、今年の春、靜岡へ行つた時、同地の南莊乘海師が話に、靜岡市中に兼てより法義を喜んで居た某が病氣に罹つて居たが、永のわづらひに醫者から手を離され、とても今日一日が持てまいと云はれたので、某は今更ながら未來が不安になつて來たので、今一度安心上たしかな所を聞きたいと云つて、自分を招いたので、自分は行つて某の枕頭で二十分許法義を話し、た所某も非常に喜んで、何時死んでも往生は間違ないと云つて、靜に死を待つて居たが、不思議にも一旦醫者に手を離された程の病人が今日に至るま

てまた持堪へて居ると云ふことである。右の例は共に初め死と云ふことを非常に厭に思ひ心配に思つたものであるが、一度佛陀の慈悲を聞いて、この度自分は彼の淨土に往生し無量壽を得るものであると氣付くや否や、前の苦痛が打ち忘れられ、死が少しも心配にならぬやうになつたのである。これ全く信仰の賜である、云はねばならぬ。

然るに世間の人、殊に眞宗の僧侶までが、往生淨土と云ふやうな未來的の信仰は、今日の社會に何の用をもなさず、また何の働をも與へないのみならず、却つて世を害し人を毒するものと思ひ、宗教の信仰は必ず現在のてなく、てはならないと云つて、死と云ふことを少しも念頭に置かず、唯現在を佛陀に救はれて、この煩悶苦惱を取つて貰へよと云ふものがある。若し、こんなことから得た信仰であつたならば、その信仰は決して金剛堅固なものとはならないで、まさかの時には忽ち變動を來すに至るであらう。余は先般某所て、死のこと、未來のことは少しも思はないが、唯難有い、唯嬉しいと云つて

居る青年信者に逢つたが、彼は余に向つて、貴方は「警世」誌上で常に實感的の信仰はつまらぬ、未來的觀念の伴はない信仰は駄目だと言はれるが、思ふに、貴方は實感的の信仰、現在安住的の信仰を味はれたことがないのであらう。なご、云つて、余の言に不満の色を現はして頻に余に詰めかけたので、余は斯う答へた。「お察しの通り、余には君のやうな實感や信仰は起らぬ。全體君の實感と云ふのは何んなものだ。何がありがたいのだ。救はれたと云ふのは何うなつたことだ。眞宗の信仰と云ふものは決してそんなぼんやりしたものではない。即ち、往生淨土門と云つて、淨土に往生すると云ふことが根本になつてゐる。死んだら地獄へ行くか極樂へ行くか分らん。また地獄や極樂が實際あるかないか分らんが、佛陀には救はれてゐる、守護られて居ると云ふやうなつかまへ所のないものではない。眞宗の信仰の中心は「大經」の第十八願であるが、そこには何う説いてある「至心に信樂して我が國に生れんと欲し、乃至十念せん。若し生れずば正覺を取らず」とあり、

また善導大師の二種深心の釋のところには「決定して深く彼の阿彌陀佛の四十八願は、衆生を攝受して疑無く慮なく、彼の願力に乗じて定んで往生を得ると信ず」とあるではないか、未來淨土に往生すると信じられた所で歡喜の念が生ずる。それが現在に反射してこそ現在に於ける煩悶もなくなり、光明中の生活と云ふ思も起るのである。君は、自分の信仰を眞宗の信仰でないと言へばそれまで、あるが、苟も眞宗の信仰であると云ふならば、そんなぼんやりとしたことではいけない。」と云つておいたことである。實に死と云ふことは、人間にとつてはこの上もない一大事である。その一大事の死に確固たる安慰がなくては、何んな歡喜も決して永く續くものではない。少し何うかすると、忽ち動搖せざるを得ない。現今の人が現在の安住のみを以つて他力信仰を獲得したものとなし、未來的の觀念が少しも念頭にないのは、彼の淺薄なる近來の現實思想にかぶれたもので、未だ眞實なる淨土眞宗の信仰に這入つたものとは云へない。されば我々は、時勢

の推移をも顧みないで、唯古人の言や書物になづむのは固よりよくないが、さりとして、現代の思想にかぶれ過ぎた爲め、自分が奉じて居る教祖や宗祖が立教開宗の根本中心までを忘れてしまふと云ふことは、實に、無慚無愧、何とも云つて見やうのないものと云はねばならぬ。思ふにこれは、求道者それ自身求め方もよくないが、一には自分に確信がなく、見識がないために世間の機嫌を損ぜんことを惟れ恐れ、淨土とか未來とか云ふことを明言し得ずして、有耶無耶に語つて信仰を人に勧めた僧侶の罪でもあらうと思ふ。我々は、よく／＼祖師や蓮師の教訓を熟讀して右の如き弊に陥らない様に注意せねばならぬ。

二六 信仰は精神上の泰山なり

孟子の語に居は氣を移すといふことがある。人は誰れてもその居所によつて氣分が色々變つて來るもので、小さい所に居れば自から小さく、大き

い所に居れば自から大きくなるといふ譯である。されば孔子も、泰山に登つて天下を小とすといはれた。この泰山といふのは、孔子の居られた所の近くにある山で、その邊での最も高峻なものである。先日、某新聞に、その山に登つた人の紀行文が掲げてあつたが、その絶頂に登ると所謂魯の國の如きは、一望に瞰下せられて、孔子が魯の國を小とするといはれたは、全くの事實であると言つてあつた。かくの如き高山に立つて所謂太陽は頭を摩し、白雲は腰をめぐるといふ所に身を置くと、自然自分の胸宇も宏潤になつて、市井に齷齪として、只管名聞を争ひ利養を競ふより他は何にもないといふものが、實に馬鹿げ切つて見えるものである。

先年余は京都東山に假寓して居たことがあるが、その寓居の二階といふは、極めて眺望がよくて、西は天王山、南は金剛山、雲煙の裡に望まれ、京都伏見の如きは、つひ眼下に見下されて、狹隘殆んど一小部落の感が起り、門前に仰ぐと、宛然小山のやうな東西兩本願寺の本堂の如きも、殆んど小兒の玩具

をみるかのやうに思はれた。て朝夕右の如き光景に接し、時に或は鬱森たる松樹の間から静に聞ゆる鐘磬の聲梵唄の響を耳にしては、眞に心の底から如何にも清淨静閑の思が生じて、天地宇宙は自分一人て占領したかのやうな気分になり胸中に名譽を得やうの位置をつくらうのといふやうな小さい心は毫も起らなくて、實に愉快を感じたのである。そして人は居る所が何より大切で、この居所如何によつては、自分の精神は高尚にもなればまた卑劣にもなつて來るものである。

余が思ふに、彼の宗敎の信仰なるものは、全く前述の高山にも比すべきものであらうと思ふ。尤も信仰は、前者の形體的な事とは違つて精神的なるもので外見似た所はないやうであるが、吾人は一度幽玄高尚なる宗敎によつて信仰が確立すると自分の胸中は忽ち朗然として宏濶になり、急に人生が眼下に展望されて來る。即ち自分は、この度は永の迷の根を斷つて證を開くことが出來、涅槃に到達することが得られて、十方三世を一念の中に包

含するのであると思つてみると、五十年六十年の人生は、名聞利養に醒眼する程のものでなければ、また、さまで執着すべき價値のあるものでもないといふことが分つて來て、丁度泰山に登つて天下を小なりと感ずると同じ譯となる。かうなつて來れば胸中は自然高尚遠大になつて人生中に起る榮枯盛衰、褒貶窮達等は、少しも自分の心頭を煩はすの料とはならないのみならず、却つて世人がこれ等の事柄によつて、日々夜々に心身を勞して居るのが如何にも氣の毒でたまらぬやうになる。故に人生には愉快なことも色々あらうけれども、終始變動せぬ眞實の愉快は、宗敎の信仰を措いては他に一つもないのである。されば高尚なる宗敎の信仰は、吾人が精神上の泰山といつても、敢て過言てはあまい。

併しながら單に右の如く人生を泰山の上から天下を瞰下するが如く、つまらないものである、語るに足らないもの、願るに足らないものであるとばかりに感じて、たゞ自分を超世間的に高く構へるといふに止まつては、それ

ては宗敎の眞意を解したとはいへない。その瞰下した小さい隘い汚ない
社會人生をば信仰の高山から絶えず手を伸ばして遊戯的に操縦驅使する
考がなくはならぬ。彼の佛陀に衆生攝化の方便があるといふのは即ち
この事である。椽の上に立つて庭上の蟻子の世話をやく。これには頭も
勞しなれば無理にこれと餘計なことをするにも及ばぬ。自然にま
かした上にその世話が出来ると同様に宗敎の信仰によつて正しき人生觀
が開けると社會人類を化導するに無闇に大騒をして世を驚かさなくても
而も改善發達が遂げられる譯である。今日世間には社會の救濟人類の幸
福を計るといつて各種の企が催されて居るがその計畫は至極結構である
がその任に當つて居る人に前述の如く高く信仰の山上に踞して而して低
く人生に手を垂れるといふものが少いので兎角仕事の中に無理があつた
りまた場合によつては世人からこれの批評などを受ける度に自分
腹を立てたり調子にのつたりなどして折角企つた仕事も成功せず或は本

人の精神動機は喜ぶべきもその結果たるや社會の救濟人類の幸福どころ
てなく却つてその反對に越ぐといふことが往々あるのを認める。故に社
會人類を救ふには須らく社會人類を大觀せねばならぬ。社會人類を大觀
するにはまた須らく身をそれ等より一段高い所に置いて靜に思惟せねば
ならないのである。

〇 二七 餘裕と宗敎

凡そ人間には餘裕と申すことが大切のものでありて地位職業の如何に
拘はらず人の品位品格といふものは皆此餘裕の心より生じて來るもので
ある、一藝一能に達した人とか或は修養の積んだ人ならば必ず胸中に何等
かの餘裕がある、英雄に閑日月があるといふのも高僧大徳が物に動せぬと
いふのも皆此心に餘裕のあるのを云ふのである、商人や實業家などに品格
を備へた人の少くないのは日夜金錢利益の事にのみ拘はりて修養が足ら

ず心に餘裕がないからである、又學生などが宇宙が解らぬとか、人生が不如意であるとか云ふて自殺するの、世の富豪が株式や商賣に失敗して煩悶身を投げるに至るの、要するに心に何等の餘裕がない所から自ら急場に處することが出来ず、周章狼狽して遂に氣を取りつめてしまうのである、餘裕さへあればたとひ一度は失敗しても、捲土重來大に勇氣を發して再び恢復の方法を見出すことが出来るであらふ。

そこへ行くと吉田松陰などといふ人はエライものである、先生が國事に奔走して獄に投ぜられた時、同牢の者に向つて孟子を講ぜられた明日にも殺されるかも知れぬ場合に臨んで、悠々道を講じて逼らざるの態度は、心に大なる餘裕があつたから出来たのである、同牢の者が先生に對して、私共の命は最早旦夕に逼つて居る、孟子の講釋を聞ても仕方がありませんまいと申した所が、先生の云はれるには、孟子を講ずるのは章句の末に走つて文字を研究するのはない、道の研究の爲めである、道なくしては一日も生存する

ことは出来ぬ、一日生存すれば一日だけの道を守らなければならぬと云つて、泰然自若として全く生死を念頭に置かれなかつたそうである、斯の如き大餘裕は常人には望まれないとしても、人は多少此餘裕を養ふて置かねばならぬ。

さて其餘裕を養ふには如何にせば宜きかといふに、平素自身の修養に注意すると、追々に進歩向上するもので、之には種々の方法もあらうが、先づ誰れにても通ずる一番の近道は宗教である、宗教といふものは一面には物を諦めるといふこと、一面には大なる力を得るもので、眞に宗教の信仰を得たものは必ず變に處して動せず、逆境に陥りても之に耐へ忍ぶだけの勇氣が生ずるものである、諦めるといふと、直ぐに例の諦らめ主義など、如何にも意久地のないやうに誤解するものがあるかも知れぬが、基督敎でも佛敎でも、凡て宗教の一面は確かに此諦らめ主義である、佛敎で諦らめるといふのは、決して意久地なく自暴自棄するの謂てはない、之を大にしては因果の